

III. 地域拠点

—関西地区 FD 連絡協議会 5年目の活動成果—

III-1. 活動成果の概要

1. 関西地区 FD 連絡協議会 第 5 回総会

本協議会の第 5 回総会が、2012 年 5 月 19 日に京都大学芝蘭会館稲盛ホールにおいて開催された。本総会では、各ワーキング・グループから 2011 年度の活動報告および 2012 年度の活動方針、ならびに決算・予算計画について報告があり、承認が得られた。また、会員校の組織的 FD の取り組みに関するポスターセッション「FD 活動報告会」が実施された。本協議会設立 5 年目を迎えた今回の総会では、これまで整えてきた体制を基盤として、今後さらに大学間の連携を深めていくことが確認された。

第 5 回総会プログラム

総 会【京都大学 芝蘭会館 稲盛ホール】13：00～

進 行：高橋 哲也（大阪府立大学）

開会挨拶：安岡 高志（立命館大学）

議 事

議 長：大塚 雄作（京都大学・代表幹事校代表）

- (1) 次期代表幹事校・幹事校の選出について
- (2) 平成 23 年度活動報告について
- (3) 平成 24 年度活動方針について
- (4) 平成 23 年度決算について
- (5) 平成 24 年度予算について
- (6) その他

ポスターセッション「FD 活動報告会」【同 山内ホール】14：45～

活動報告【同 稲盛ホール】16：00～

- (1) 「就業力育成支援のための携帯電話を利用した出席確認システムの導入」
高橋 美貴（大阪商業大学）
- (2) 「『FD に関する実態調査(2012)』結果速報」
高橋 雄介（京都大学）

閉会挨拶：大塚 雄作（京都大学・代表幹事校代表）

情報交換会【同 山内ホール】17：30～

進 行：田口 真奈（京都大学）

第5回総会の議事録を以下に記す。

【総会議事】

1.開会の辞

・開会に先立ち、進行役の高橋哲也教授（大阪府立大学）より、本協議会規約第6条第6項による出席会員校数の要件を充たしておらず、本総会は規約上不成立となるが、欠席校に本日の議事録・資料等を送付し、了承を得て成立としたい旨説明があり会場の了承を得た。（注：後日、総会に欠席した会員校に対して事務局より議事録・資料を送付し、回答期限の2週間以内に出席校数（51校）と併せて過半数（60校）を超える承認が得られたので、総会が成立した。）

・安岡高志教授（立命館大学）より、開会のあいさつがあった。

2.議長紹介

- ・高橋教授より、本協議会規約第7条第3項に基づき、代表幹事校代表の大塚雄作教授（京都大学）が本日の総会の議長となることについて説明があった。
- ・大塚議長より、あいさつがあった。

3.議事

(1)次期代表幹事校、幹事校の選出について

①代表幹事校：京都大学（20.4.26～24.4.25）

- ・議長より、代表幹事校の任期満了による交代について説明があり、次期代表幹事校について、立候補を募った。
- ・立候補がなかったため、議長より引き続き京都大学が代表幹事校を務めることを提案し、会場の了承を得た。
- ・次期任期について以下の通り説明があった。
任期：4年 本総会承認後～第9回総会まで
第9回総会（平成28年度開催）において次期代表幹事校選出

②常任幹事校・幹事校：

- －大阪大学、神戸大学、立命館大学、同志社大学、大阪市立大学（常任幹事校、20.4.26～24.4.25）
- －大阪府立大学、関西学院大学、龍谷大学（幹事校、22.4.26～24.4.25）
- ・議長より、幹事校の任期満了による交代について説明があり、次期幹事校について、立候補を募った。
- ・立候補がなかったため、議長より次期任期（本総会承認後～第7回総会まで）についても現行の体制で継続したい旨提案し、会場の了承を得た。
- ・議長より、幹事校の任期については基本2年であるが、幹事会の審議により幹事校の中から、任期4年（本総会承認後～第9回総会まで）の常任幹事校を5校程度選出することとなっている旨説明があった。4月20日の幹事会において、現行の幹事校が本総会で認められた場合、常任幹事校についても現行の5校で継続することを意思確認していることが報告された。

③監査役：近畿大学、大阪工業大学

- ・議長より監査役の任期満了による交代について説明があり、次期監査役について立候補を募った。

- ・立候補がなかったため、議長より引き続き近畿大学、大阪工業大学に監査役を務めていただきたい旨提案し、会場の了承を得た。
- ・監査役の任期については、総会承認後から第7回総会までの2年間であると説明があった。

(2)平成 23 年度活動報告および平成 24 年度活動方針案について

各ワーキンググループ（WG）の責任校より以下のとおり報告があった。

① FD 情報支援 WG（報告者：京都大学 溝上慎一准教授）

- ・溝上准教授より、平成 23 年度の活動について報告があった。また、情報支援 WG 解散に伴う、WG 申し合わせ改正についても説明があった。

② FD 共同実施 WG（報告者：大阪大学 山口和也教授）

- ・山口教授より、平成 23 年度の活動及び平成 24 年度活動方針案について報告があった。

③ FD 連携企画 WG（報告者：立命館大学 安岡高志教授）

- ・安岡教授より、平成 23 年度の活動及び平成 24 年度活動方針案について報告があった。

④広報 WG（報告者：大阪市立大学 大久保敦教授）

- ・大久保教授より、平成 23 年度の活動及び平成 24 年度活動方針案について報告があった。

⑤研究 WG（報告者：神戸大学 山内乾史教授）

- ・山内教授より、平成 23 年度の活動及び平成 24 年度活動方針案について報告があった。

以上、各 WG の活動報告および活動方針案について、会場において了承された。

(3) 平成 23 年度決算案および平成 24 年度予算案について（報告者：京都大学学務部教務企画課 岩井信孝課長）

- ・事務局（京都大学学務部教務企画課）より、平成 23 年度決算案について説明があった。
- ・監査役の久世雅之氏（近畿大学）より、平成 23 年度決算に関して近畿大学・大阪工業大学によって監査をおこなった結果、すべて適正であった旨報告があった。平成 23 年度決算について、会場において了承された。
- ・事務局より、平成 24 年度予算案について説明があり、会場において了承された。

(4) その他

酒井博之准教授（京都大学）より、次年度以降の FD 活動報告会の発表を3年に1度のローテーション制とする案について説明があり、会場において了承された。

<質疑応答など>

- ・活動報告会の発表校を 40 校にすると、負担を感じる会員校が欠席することになり、総会出席校が減少するのではないかと懸念されている。総会出席を呼びかけることも考えてほしい。
 - ポスターセッション自体は参加者から高い評価を受けている。次年度以降はこれまで積極的に活動していない大学に参加を呼びかけるので、結果として総会参加校が増えるのではないかと考えている。
- ・40 件という発表件数が妥当である根拠は何か。小規模大学の場合、ポスター発表に割くマンパワーがない。発表ができない場合、翌年度に発表義務付けではなく、努力目標にする

方が良いのでは。

→40校という数字は、ピアレビューの数を1発表あたり2校にすれば、3年でローテーションするのではという考えに基づく。義務付けについては、「原則として」という文言を幹事会において挿入しており、強制であるというよりお願いであると考えてほしい。今後文言についても検討する。

- ・組織的FD活動の報告は大学が認めたFD活動の報告のみが対象なのか。

→原則としてはそうであるが、各大学の連絡担当者が把握しており、大学の取組として報告することを認めるのであれば問題はないと考える。

- ・ポスターセッションを増やすと時間も取らないといけないのではないかと思うが、どのように考えているか。

→今後検討したい。

- ・なぜ総会の定数が充足しないのか。

→総会が形骸化していると捉えられているために参加校が減少したのかもしれない。報告会が各会員校のFD活動の紹介、意見交換の場であることを伝え、参加をうながすことが必要ではないかと思う。また、こうしたポスター発表は認証評価の際に説得力があり、かつコンパクトな資料となることも周知し、積極的な参加を呼び掛けたい。

(以上で議事録終了)

場所を山内ホールに写し、ポスターセッション「FD活動報告会」がおこなわれた（その詳細については、[次項 III-2](#)を参照されたい）。

再び稲盛ホールに戻り、本協議会会員校による活動報告がおこなわれた。まずはじめに高橋美貴氏（大阪商業大学）より、「就業力育成支援のための携帯電話を利用した出席確認システムの導入」について報告があった。次に、高橋雄介氏（京都大学）より、「FDに関する実態調査(2012)」について報告があった。

2. 組織と実施体制

本協議会の会員校数は、2012年10月1日現在で145校（121法人）である。括弧内の「法人」の表記については、同一法人組織である大学と短期大学（部）が単一の機関として入会していることを示す。昨年2011年10月1日時点では、138校（117法人）であり、会員校数は1年間で7校（4法人）の増加となる。会員校リストを表1に示す（ただし、表1は2012年10月1日現在）。

本協議会の組織図を図1に示す。本協議会の組織体制は、代表幹事校1校、常任幹事校5校、幹事校11校、監査役2校で構成されている（表2）。

本協議会の活動を推進するため、5つのWGとして「FD情報支援WG」「FD共同実施WG」「FD連携企画WG」「広報WG」「研究WG」が設置されている。これらWGの活動については、[本書 III-3](#)以降で詳述されているのでそちらを参照いただきたい。なお、各WGには、円滑な運営のために、数校の幹事校によって構成される「部」が設置されている（表3）。部の構成校については設立当初より変化はない。（なお、FD情報支援WGについては、第5回総会にて解散と他WGへの合併が提案され、了承を得た。）

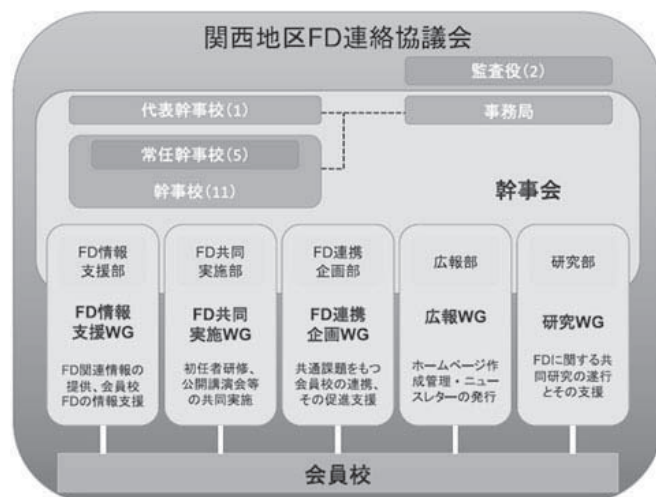


図1 関西地区FD連絡協議会の組織図

表1 会員校名リスト 2012年10月1日現在、145校(121法人)

藍野大学、芦屋学園短期大学、池坊短期大学、追手門学院大学、大阪大学、大阪青山大学、大阪医科大学、大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部*、大阪観光大学、大阪教育大学、大阪キリスト教短期大学、大阪経済大学、大阪経済法科大学、大阪工業大学、大阪国際大学、大阪産業大学、大阪歯科大学、大阪樟蔭女子大学・大阪樟蔭女子大学短期大学部*、大阪商業大学、大阪女学院大学、大阪市立大学、大阪成蹊大学、大阪成蹊短期大学、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学*、大阪体育大学、大阪電気通信大学、大阪人間科学大学・大阪薫英女子短期大学*、大阪府立大学、大阪保健医療大学、大阪薬科大学、大谷大学・大谷大学短期大学部*、華頂短期大学、関西大学、関西医科大学、関西医療大学、関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部、関西看護医療大学、関西国際大学、関西福祉科学大学・関西女子短期大学*、関西学院大学、畿央大学、京都大学、京都医療科学大学、京都外国語大学・京都外国語短期大学*、京都学園大学、京都華頂大学・華頂短期大学*、京都教育大学、京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部*、京都産業大学、京都女子大学・京都女子大学短期大学部、京都市立芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、京都橘大学、京都ノートルダム女子大学、京都府立大学、京都文教大学・京都文教短期大学*、京都薬科大学、近畿大学、甲子園大学・甲子園短期大学*、甲南大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸海星女子学院大学、神戸国際大学、神戸市外国語大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女子大学・神戸女子短期大学*、神戸親和女子大学、神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部、神戸薬科大学、神戸山手大学・神戸山手短期大学*、堺女子短期大学、滋賀大学、滋賀医科大学、滋賀県立大学、滋賀短期大学、四條畷学園大学・四條畷学園短期大学部、四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部*、夙川学院短期大学、聖泉大学、聖母女学院短期大学、聖和短期大学、摂南大学、相愛大学、園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部、宝塚大学、帝塚山大学、天理大学、同志社大学、同志社女子大学、東洋食品工業短期大学、常磐会学園大学、長浜バイオ大学、奈良大学、奈良教育大学、奈良産業大学、奈良女子大学、奈良文化女子短期大学、梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部、羽衣国際大学、花園大学、阪南大学、東大阪大学・東大阪大学短期大学部*、姫路獨協大学、兵庫大学、兵庫教育大学、兵庫県立大学、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部*、びわこ成蹊スポーツ大学、佛教大学、平安女学院大学、湊川短期大学、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部*、桃山学院大学、森ノ宮医療大学、立命館大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部*、流通科学大学、和歌山大学、和歌山県立医科大学、和歌山信愛女子短期大学

*同一法人組織である大学と短期大学(部)が、単一の機関として入会

表 2 関西地区 FD 連絡協議会の組織体制

代表幹事校（任期4年）	京都大学
事務局	京都大学
常任幹事校（任期4年）	大阪大学 大阪市立大学 神戸大学 同志社大学 立命館大学
幹事校（任期4年）	大阪府立大学 関西大学* 関西学院大学 神戸常盤大学* 龍谷大学・龍谷大学短期大学部 和歌山大学*
監査役（任期2年）	大阪工業大学 近畿大学

* は規約施行の最初の特例措置として、3年任期の幹事校。

表 3 関西地区 FD 連絡協議会の 5 つの部

FD 情報支援部	同志社大学* 大阪府立大学 京都大学
FD 共同実施部	大阪大学* 関西学院大学 京都大学
FD 連携企画部	立命館大学* 関西大学 神戸常盤大学 京都大学
広報部	大阪市立大学* 和歌山大学 京都大学
研究部	神戸大学* 龍谷大学・龍谷大学短期大学部

*は WG の責任校。各部に、代表幹事校（京都大学）が連絡担当として加わる。

（なお、FD 情報支援部は第 5 回総会にて解散、他 WG への合併が提案され、了承を得た。同志社大学は研究部へ、大阪府立大学は FD 連携企画部に、それぞれ配置転換がなされた。）

3. 幹事校会議（2012 年度第 1 回、通算第 6 回）

2012年度におこなわれた幹事校会議の議事および資料について以下に挙げる。議事次第および〇印を付した資料は、本節資料として示す。幹事校メーリングリストを利用した回議については省略する。

日 時：平成 24 年 4 月 20 日（金）14：00～

場 所：京都大学本部棟大会議室（事務本部棟 5 階）

議 題

1. 次期代表幹事校・幹事校の選出について（任期満了による交替）
2. 規約第 10 条に基づくワーキング・グループに関する申合せについて
3. 平成 23 年度活動報告案および平成 24 年度活動方針案について
4. 平成 23 年度決算案および平成 24 年度予算案について
5. その他

（配付資料）

- 資料－1 関西地区FD 連絡協議会幹事会（第6回）出席者名簿（本節資料1）
- 資料－2 平成23年度関西地区FD連絡協議会事業報告〔事務局関連〕（本節資料2）
- 資料－3 関西地区FD連絡協議会会員校一覧・大学連絡先（平成24年4月1日現在）

- 資料－4 関西地区FD連絡協議会幹事会（第5回）議事録（案）（平成23年4月27日開催）
- 資料－5 WG申合せ（案）
- 資料－6 FD情報支援WG活動報告（本節資料3）
- 資料－7 FD共同実施WG活動報告・活動方針案（本節資料4）
- 資料－8 FD連携企画WG活動報告・活動方針案（本節資料5）
- 資料－9 広報WG活動報告・活動方針案（本節資料6）
- 資料－10 研究WG活動報告・活動方針案（本節資料7）
- 資料－11 平成23年度関西地区FD連絡協議会決算書（案）
- 資料－12 平成24年度関西地区FD連絡協議会予算書（案）
- 資料－13 『FDに関する実態調査（2012）』結果速報
- 資料－14 FD活動の報告会ポスター発表校一覧
- 資料－15 次年度以降のFD活動報告会の開催について（案）
- 資料－16 関西地区FD連絡協議会第5回総会プログラム（案）
- 資料－17 関西地区FD連絡協議会第5回総会『当日の手順』（案）

（坂本 尚志）

関西地区FD連絡協議会幹事会（第6回）出席者名簿

平成24年4月20日

幹事校名	幹事会出席者			備考
	部署名	役職	氏名	
大阪大学	全学教育推進機構	教育学習支援部門・教授	山口和也	常任幹事校
大阪市立大学	大学教育研究センター	副所長・教授	大久保敦	常任幹事校
神戸大学	大学教育推進機構	全学共通教育部長	大野隆	常任幹事校
〃	大学教育推進機構	大学教育推進部副部長	山内乾史	
同志社大学	教育開発センター事務室		松本仁美	常任幹事校
立命館大学	教育開発推進機構	教育開発支援センター長	沖裕貴	常任幹事校
〃	教育開発推進機構	教育開発支援センター副センター長	安岡高志	
〃	教育開発支援課	課長	佐々木浩二	
大阪府立大学	高等教育推進機構	副学長・高等教育推進機構長	高橋哲也	幹事校
〃	高等教育推進機構	高等教育推進機構教育推進課長	柳嘉夫	
関西大学	教育開発支援センター	センター長	田中俊也	幹事校
〃	授業支援グループ	グループ長	萩原恒夫	
関西学院大学	高等教育推進センター	教育技術主事	平田薫	幹事校
神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部	保健科学学部	講師	黒野利佐子	幹事校
龍谷大学・龍谷大学短期大学部	教学企画部	課員	野澤信孝	幹事校
和歌山大学	システム工学部	教授	伊東千尋	幹事校
京都大学	高等教育研究開発推進センター	センター長・教授	大塚雄作	代表幹事校
〃	〃	教授	松下佳代	
〃	〃	教授	飯吉透	
〃	〃	准教授	溝上慎一	
〃	〃	准教授	田口真奈	
〃	〃	准教授	酒井博之	

■平成23年度関西地区FD連絡協議会事業報告〔事務局関連〕

年月日	会議等	内容	備考
23.4.4	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：関西学院大学
23.4.27	幹事会	関西地区FD連絡協議会幹事会(第5回) ①平成22年度活動報告案について ②平成23年度活動方針案について ③平成22年度決算案について ④平成23年度予算案について ⑤次期幹事校の選出について ⑥その他	会場：京都大学本部棟大会議室 ◆平成22年度活動報告案・平成23年度活動方針案の決定 ◆平成23年度予算案の決定 ◆平成22年度決算案の決定 会計監査は監査校(大阪工業大学、近畿大学)により実施のうえ、総会に提出する旨了承 ◆幹事校の継続を決定 ◆総会におけるポスター発表12校およびピアレビュー担当校36校について了承
23.5.11	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：京都大学
23.5.16	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：京都大学
23.5.17	幹事会【報告】	関西地区FD連絡協議会(大学/短期大学(部)併設校)一括取り扱い申し込みについて	◆一括取り扱い：関西外国語大学/関西外国語大学短期大学部
23.5.21	総会	関西地区FD連絡協議会第4回総会 ①平成22年度活動報告案について ②平成23年度活動方針案について ③平成22年度決算案について ④平成23年度予算案について ⑤次期幹事校の選出について ⑥その他	会場：京都大学時計台記念館国際交流ホール 参加会員校：60校 総会出席者：131名 ①②活動報告(ワーキンググループ) FD情報支援WG：高橋 哲也教授(大阪府立大学) FD共同実施WG：山成 数明教授(大阪大学) FD連携企画WG：沖 裕貴教授(立命館大学) 広報WG：大久保 敦教授(大阪市立大学) 研究WG：米谷 淳教授(神戸大学) ③平成22年度決算案の承認 会計監査は監査校(大阪工業大学、近畿大学)により実施された旨報告 ④次期幹事校は現状を維持することについて承認された
23.5.25	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：大阪工業大学
23.5.25	(全会員校)	会費納入のお願い	
23.6.10	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：関西学院大学
23.6.20	幹事会【回議】	新規入会申込について	◆新規入会：兵庫県立大学
23.6.30	幹事会【報告】	関西地区FD連絡協議会(大学/短期大学(部)併設校)一括取り扱い申し込みについて	◆一括取り扱い：四條畷学園大学・四條畷学園短期大学部
23.7.27	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：大阪市立大学
23.7.27	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：立命館大学
23.7.28	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：大阪大学
23.10.3	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会主催ワークショップの開催について	
23.10.31	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：京都大学
23.11.10	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：大阪樟蔭女子大学
23.11.10	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：龍谷大学
23.12.8	幹事会(連絡)	関西地区FD連絡協議会第5回総会の日程について	
23.12.20	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：京都大学
23.12.21	幹事会【回議】	新規入会申込について	◆新規入会：関西国際大学
24.1.13	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：関西大学
24.1.13	幹事会【回議】	新規入会申込について	◆新規入会：森ノ宮医療大学
24.1.16	幹事会(連絡)	「FDに関する実態調査」の実施について	
24.1.17	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会協賛依頼について	◆協賛：追手門学園大学
24.1.18	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会パイロット校登録について	◆パイロット校登録：大阪府立大学
24.1.19	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：京都大学
24.2.17	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：大阪大学
24.3.2	幹事会【報告】	関西地区FD連絡協議会(大学/短期大学(部)併設校)一括取り扱い申し込みについて	◆一括取り扱い：神戸常磐大学・神戸常盤大学短期大学部
24.3.6	幹事会【回議】	関西地区FD連絡協議会共催依頼について	◆共催：滋賀県立大学
24.3.13	幹事会	関西地区FD連絡協議会第6回幹事会開催のご案内	会場：京都大学総務部大会議室 ①平成23年度活動報告案について ②平成24年度活動方針案について ③平成23年度決算案について ④平成24年度予算案について ⑤次期代表幹事校・幹事校の選出について ⑥その他

平成23年度FD情報支援WG活動報告

勝山貴之(同志社大学)、高橋哲也(大阪府立大学)、溝上慎一(京都大学)

1. 目的

講演講師、シンポジウム・ワークショップのプログラムに関する情報支援の活動

2. 活動

・**利用実績について** 2009年度15件だった利用実績が、2010年度は7件、2011年度はさらに6件へと減少の一途をたどっている(下記の表参照)。従来からのニューズレター(年2回)、関西地区FD連絡協議会のHPに加えて、総会での利用の促し、あさがおMLの検索機能追加、情報提供ルールの見直しなど、考えられる対応はおこなってきたが、結果はご覧の通りであり、利用率は低調であると言わざるを得ない。

・**課題** 利用実績(表)を見てわかるように、広義のFDで情報提供を求められるケースが多く、相談内容が多様である。また、多少は人柄や人物的な印象・評価も考慮して紹介をしなければならないことを含めると、情報支援WGでもっている情報量は決して多くなく、設置当初からの懸案事項が解決されないまま今日に至っている。委員の交代も考えると、FD情報支援の活動自体を見直す時期に来ているとも言える。

利用実績

1	0527-2011	帝塚山大学	大学院FDについて
2	0805-2011	兵庫県立大学工学研究科	授業法について
3	0907-2011	大阪樟蔭女子大学	厳格な成績評価
4	0929-2011	関西看護医療大学	大学におけるハラスメント(アカハラ、パワハラなど)
5	1115-2011	大阪成蹊短大	多様な学生、基礎学力の弱い学生への教育
6	1130-2011	京都女子大学	初年次教育の充実(授業計画・内容、テキストの使用について)

以上

FD 共同実施 WG 活動報告・活動方針案

1. FD 共同実施 WG の目的と組織体制

FD 共同実施 WG は、初任者研修の企画立案をはじめ、会員校が共同で実施する活動を行う。FD 共同実施 WG2011 は、大阪大学(常任幹事校)、(関西学院大学 幹事校)、京都大学(代表幹事校) (以上 FD 共同実施部)、大阪成蹊短期大学、大阪樟蔭女子大学、関西看護医療大学、畿央大学、京都文教大学、京都文教短期大学、神戸大学、滋賀県立大学、関西外国大学・関西外国語大学短期大学部、立命館大学、和歌山大学(50音順)で構成される。

2. 2011 年度活動報告

2011 年度は、①初任教員向けプログラムの企画・運営(2-1-1) および②その評価(2-1-2)、また、③FD 研修会の開催支援(2-2)の3つの活動を行った。

2-1. 初任教員向けプログラム(愛称:カンジュニ)の企画・運営と評価

2-1-1. 初任教員向けプログラムの企画・運営:概要とプログラム

「初任教員向けプログラム」とは、現在、関西 FD 加盟校で実施されている研修会のうち「大学の所属に関係なく、大学初任教員であれば参加して効果が見込まれる」ものを公開してもらい、それを関西 FD 認定プログラムとする。そのような関西 FD 認定プログラムを集めた研修マトリックスを作成、周知することによって、各大学の研修会を相互利用できる機会を提供するものである(図1)。

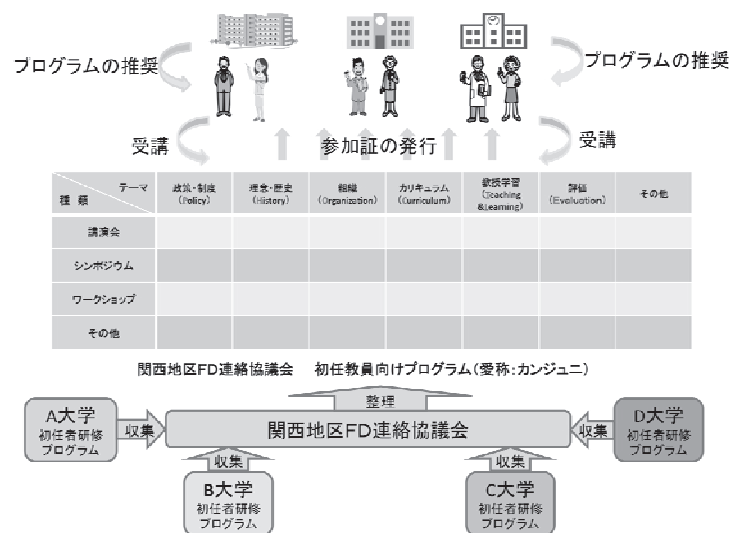


図 1.初任教員向けプログラムの概要

2011 年度は合計 7 大学 10 回の研修会が公開され、関西地区 FD 連絡協議会より「初任教員向けプログラム」として 60 名以上の参加者があった(表 1)。また、2-1-2 で示すように、初任教員向けプログラムの評価を行うため事後アンケートを実施した。

表 1. 2011 年度に公開された各大学の研修会のテーマと参加人数、事後アンケート回答者数

日時	開催大学	テーマ	参加者数	アンケート回答者数
2011.3.29	大阪大学	対話授業とは何か	5 人	—
2011.4.23	関西学院大学	大学の FD をめぐる諸問題	8 人	—
2011.4.29	滋賀県立大学	授業の基本ワークショップ	18 人	—
2011.8.4	京都大学	若手のための教育実践講座	0 人	—
2011.8.8-10	関西学院大学	大学教員のための講義方法基礎の基礎	6 人	6 人
2011.9.9	大阪工業大学	授業の基本	16 人	16 人
2011.9.13	大阪大学	平成 23 年度大阪大学ファカルティ・デベロップメント(FD)研修	5 人	5 人
2011.11.12	立命館大学	立命館大学ワークショップ「受容的に聴く力(イヌ・バラ法)」「アサーション・トレーニング」	3 人	3 人
2011.12.10	大阪樟蔭女子大学	どうする、どうやる成績評価	4 人	2 人
2012.2.12	京都大学	大学教育におけるポートフォリオの活用：授業改善からカリキュラム改善へ	—	—

2-1-2. 初任教員向けプログラムの評価：事後アンケート結果

初任教員向けプログラムに参加した教職員に対して、事後アンケートを行った。実施は「大学教員のための講義方法基礎の基礎」から「どうする、どうやる成績評価」の4回の研修会で行われ、合計33名（延べ数）がアンケートに回答した。以下に、アンケートの回答を示す（欠損値あり）。質問4~8については、自由記述によるアンケートであったため、回答を内容ごとに整理し、それぞれの内容についての記述例を紹介する。

質問 1.あなたはどのような立場で今回の研修会に参加しましたか

- 新任教員として：13名
- 学内のFD担当委員として：4名
- 新任教員ではないが研修会に関心を持って：9名
- 事務職員として：1名
- その他：1名（次年度より講義を担当する可能性があったため）

質問 2.あなたは今回の研修会のことをどのようにして知りましたか（複数回答可）

- 学内のビラ・ポスターから：3名
- 関西FDのHPから：6名
- FD業務を担当する教職員から：15名
- その他の教職員から：3名
- 関西FDからのEメールによる案内で：5名
- その他：3名（関西FDの懇親会で：1名、その他2名は未記入）

質問 3.あなたは今回の研修会に参加したきっかけは何ですか（複数回答可）

- 大学から参加するよう指示があったから：4名
- FD 担当委員の業務として参加する必要があったから：3名
- 自分の教育能力を高めたかったから：19名
- 大学教育を考える機会が欲しかったから：11名
- 実際に教育を行う上で悩んだり困ったりしたことがあるから：11名
- 研修会の内容そのものに興味をもったから：14名
- 他大学の研修会に参加してみたかったから：3名
- その他：2名（プレFD 企画を立てるうえでの参考にするため：1名、今年4月23日に行われたFD研修会に参加し、あまりにもショックを受け、今回に期待しました：1名）

質問 4.今回の研修会で参考になった点をお書きください（自由記述）**【授業スキルについて】**

回答例：授業のやり方について、良い例、悪い例を実際に演じて見せてくださったことで、自分の授業をどう改善していけばよいかイメージしやすかったです。また、板書をした後の立ち位置などについても、勉強になりました。

【他教員との交流について】

回答例：他大学の教員の方との意見交換で、悩みや工夫点を共有できたこと。

【高等教育の現状について】

回答例：全体講演のお話で、アメリカの教育成果を主体にした教育についての考え方、カリキュラム作り、また教員の時間の使い方が、昨今の教育成果や質保証の議論を理解するうえで参考になりました。

質問 5.今回の研修会で改善したほうがよい点をお書きください（自由記述）**【時間配分について】**

回答例：全体としてとても満足しています。ただ、先生に質問できる時間が限られていたのが少しだけ残念でした。時間があれば、学生の答えにうまく反応する（雰囲気や和ませる・安心感を与える・題材に興味を持たせるなどの）スキルを伸ばすためには、何を心がけたらいいのかなど、聞いてみたいと思いました。

【参加者に関する情報について】

回答例：グループワークでは、自己紹介をする時間もとれずに、一緒のグループの方たちがどのようなバックグラウンドをお持ちなのかを知る機会がなかったのが残念でした。

【参加条件について】

回答例：参加の縛りが、「教歴 10 年未満」であれば、30 名集まったかもしれません。「スキルアップしたい方によりオープンに」という意味です。

質問 6.今回の研修会全体の感想についてお書きください（自由記述）**【有意義であった】**

回答例：非常に有意義な研修会であったと思う。時間的にはコンパクトながら実のある研修となっており、参加しやすくかつ得るものがあった内容でした。

【参加者が熱心であった】

回答例：もう少し参加者が多ければもっと様々な意見や考え方を知ることができたように思う。しかし、参加者が積極的に参加し、活気のある研修会でよかったと思う。

質問 7. 今回のような他大学の研修会を受講できる制度について、ご意見・ご感想があればお書きください（自由記述）

【有意義な制度である】

回答例：研修の機会が増えるため、ぜひ継続してほしい。

【他大学の教員と交流することのメリット】

回答例：同じ大学の先生同士よりも、気軽に講義内容のことなど話せるのではないのでしょうか？（同じ学内だと、お互いに遠慮&警戒してしまっていて言いにくいものと思われるので。）

【独力で研修会を実施することが困難な大学に対する支援として有効】

回答例：規模の小さな大学では、FD 活動が不十分なので、外部の研修会に参加させて頂けると非常に助かります。

質問 8. この質問は FD 担当委員として参加された方のみにお聞きします。自校の研修会を企画する上で、今回の研修会に参加して参考になった点・参考にはならなかった点をそれぞれお書きください（自由記述）

*回答が少数であったため、全ての記述を以下に紹介する

- 具体的な教育スキルを身につけるためのセミナーでは、どのような項目を取り上げればよいかの参考になりました。
- （参考になった点）・外部講師の招へいと模擬授業の組み合わせで、バランスのとれた研修会となっていた点。
- （参考になった点）繰り返しになりますが、研修の意義は、それほど説明を尽くさなくても各先生が自分なりに汲んでくれるようになることです。ただし、これに至るまで「何か」があるのだと思います。（参考にならなかった点）特になのですが、自校の仕事の仕方が影響することもあるのかな、とは思いますが。普段、トップダウンが多い大学だから、ピアワークが受け入れられやすくなるというのがあるのかもしれないし、逆に、民主的だと研修タイプが受け入れられやすくなるのかもしれないね。
- 外部に開かれた研修会はこれまで実施実績がありませんでしたので、実施方法等について参考になりました。
- 自校は小規模な大学のため初任教員がいない、もしくは1名のみという年度もありますので、初任教員向け研修という企画では実施が難しく、他の観点からの企画なら可能かと思えます。

2-2. FD 研修会の開催支援

共同実施WGの活動目的の一つとして、「単独ではFD研修会の開催が困難な大学に対して、研修会開催に向けた様々な支援を行うこと」があげられる。2011年度は共同実施WGのメンバーでもある大阪樟蔭女子大学より依頼を受け、成績評価に関わる研修会の開催支援をおこなった（研修会は初任教員向けプログラムとして公開された）。具体的な支援として行ったのは、1) プログラムの作成、2) 講師の紹介、3) グループワークのファシリテーターの派遣の3点である。以下に示すように研修会に対する肯定的な評価が多かったことから、開催支援

は成功したと考えることができるだろう。

＜研修会の感想＞

- 評価に関して、多くの先生方とお話できたことが収穫。悩んでいるのは自分だけではないことを確認したと共に、情報の共有の必要性も感じました。
- ユニバーサル・アクセス時代の大学教育の評価については継続的に研究して行きたい。
- アカデミック・スキルズに関する有田先生のお話はとてもよかったです。アカデミック・スキルズの授業が導入される背景やねらい今後の議題についてなるほどと納得しながら聴く事ができました。また、グループワークでは他の先生方が苦勞・工夫されている事項を伺う機会があり今後の授業づくりを考える際の参考になりました。
- 成績評価の悩み所が、自分だけでなく共有できるものだったと分かり、心強かった。「厳格な評価」の意味が、点数を辛くすること（学習内容をレベルアップすること）と、厳正に公平に評価するという意味とが混在したままだった点を、もっと議論したかった。
- グループワークを通して、専門が異なる本学及び他大学の教員とともに成績評価における悩みを話し合い、具体的に成績評価を厳格に行うための様々な工夫を自分自身に生かしたいと思った。
- 私自身は成績評価に困っていなかったのですが、どのような点に困ることがあるのかを知る良い機会となりました。
- 成績評価について、多様な意見を聞くことができ有意義であった。ただ、意見を出し合ってもなかなか解決できないテーマについては、指定討論者等より一定の回答の得られる場面があるとなお良かったように思う。
- 他の先生方とお話をする機会が持てて良かったです。グループワークも盛り上がっていて勉強になりました。

3.2012 年度の活動方針案

3-1. 初任教員向けプログラムの充実と拡大

現行の「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」の企画・運営と評価、FD 研修会開催支援を継続させる。そして、「初任教員向けプログラム」への参加プログラムを増加させるとともに、すでに参加されているプログラムの充実を目指す。具体的には、

1. 「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」を広報し、多くの大学からの参加を促す。
2. ニーズのあるプログラムの新規開発を支援し、「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」を充実させる。
3. 「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」に公開されているプログラムについて、希望により事後検討会を実施し、プログラムの充実をはかる。

3-2. 予算（案）

1. ポスター作成
2. プログラムの新規開拓のための費用
3. 事後検討会（研究会）開催のための費用（5 回程度実施）

Ⅲ-1. 資料 4

関西 FD 共同実施 WG2012 年度予算案

品目	内訳	金額
1 初任教員向けプログラム (カンジュニ)広報	パンフレット・ポスター・ホームページ作成・発送	¥150,000
2 初任教員向けプログラム 新規開拓のための費用	研修会参観交通費	¥15,000
	研修会開催補助(講師謝金, 広報等)	¥50,000
	アルバイト謝金(1名×3回)	¥30,000
3 事後検討会(研究会)開催の ための費用(5回程度実施)	雑費	¥10,000
合計		¥255,000

※「1.パンフレット・ポスター・ホームページ作成・発送」は 2010 年度の実績より算出

※「3.雑費」は事後検討会時のお茶やお菓子, 資料印刷代など (1回 2000 円×5回)

以上

FD 連携企画 WG 2012 年度活動報告・活動方針案

2012.4.20 幹事会

立命館大学、関西大学、神戸常盤大学、京都大学

1. FD 連携企画 WG の目的と組織体制

1-1. 目的

FD 連携企画 WG の目的は、関西地区 FD 連絡協議会の会員校のうち、共通のテーマ（問題別、アプローチ別、組織別、ディシプリン別など）を抱える大学がグループを作り、協働で問題への対処に取り組むことである。そのため、一回限りのイベントではなく、継続的に情報交換しながら、協働的に教育改善・FD を進めるための緩やかなコミュニティ形成を支援する。テーマの一般化を急がず、できるだけ各大学のローカルティに根ざしたコミュニティとなるようにする。また、できるだけ、まだ組織化されていないテーマを掘り起こすようにする。

1-2. 組織体制

FD 連携企画部と FD 連携企画ワーキンググループ（WG）は、2012 年 4 月現在、以下の大学で構成されている（氏名は代表のみ、敬称略）。

◇FD 連携企画部

- ・立命館大学（安岡高志）……責任校
- ・関西大学（田中俊也）
- ・神戸常盤大学（松田光信）
- ・京都大学（松下佳代、田川千尋、坂本尚志）……事務局

◇関西 FD パイロット校

- ・神戸常盤大学（松田光信）：2008.5～（2011.5 更新）
- ・藍野大学医療保健学部理学療法学科（平山朋子）：2009.3～
- ・京都ノートルダム女子大学人間文化学部英語英文学科（須川いづみ）：2009.5～
- ・大阪府立大学（新井隆景）：2012.1～

※パイロット校の認定期間（3 年間・更新可）

※藍野大学、京都ノートルダム女子大学については、現在更新の意向を確認中

◇FD 連携企画 WG

上記の 7 校

+ 京都精華大学共通教育センター（高橋伸一）……2011 年度より参加 計 8 校

2. 2011 年度活動報告

2-1. ワークショップの開催

2011 年 12 月 17 日（土）に立命館大学衣笠キャンパスにおいて、第 8 回関西地区 FD

連絡協議会主催イベント「ワークショップ：思考し表現する学生を育てるIV—ライティング指導の方法—」を開催した。本活動は、昨年度より好評を博している形式—講演とワークショップ—で行われた。以下に、このワークショップのプログラム、当日の状況、アンケート結果を報告する。

◆プログラム

13:00～13:10 開会あいさつ

田中 每実（関西地区 FD 連絡協議会代表幹事校代表・
京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

13:10～14:10 講演

「『モジュール』に基づいたレポート、小論文の作成技法について」

小田中 章浩（大阪市立大学文学研究科教授）

14:10～14:40 事例紹介

「立命館大学における初年次日本語リテラシー科目の取組」

薄井 道正（立命館守山中学校・高等学校教諭／
立命館大学非常勤講師）

15:00～16:30 テーマ別グループワーク

16:40～18:00 全体討論

◆当日の様子

参加者は会員校から 40 名、非会員校から 9 名の計 49 名であった。例年のことであるが、今年も東京や宮崎など遠方からの参加者が少なからずあり、本テーマへの関心の深さがうかがわれた。サブタイトルを「ライティング指導の方法」とした今年は、日頃指導に関わる参加者たちが実践において抱える問題意識を持ち寄り熱心に参加する姿が見られた。

◇第 I 部

①講演（小田中章浩氏）

第 I 部では、田中俊也氏（関西大学、本 WG）による司会のもと、講演と事例紹介が行われた。大阪市立大学の小田中章浩教授による講演では、小田中氏がフランス政府給費生として留学をした際に学んだフランス流文章作成法である **dissertation** に必要な技法を日本語の文脈に置き換えつつ開発したという文章作成方法について、前任校である岡山理科大学で担当していた「文章表現法」、および現任校での初年次セミナーや卒論指導における指導実践が紹介された。これらの授業では論理的文章を作成するために必要な考え方を学生が学ぶことが目的とされている。小田中氏は論理的であることとそれを文章化することの間にある問題を思考パターンの問題であるととらえ、文章の設計図を考えそれを文章化するプロセスを教えている。文章構造を学ぶことで、学生はただのエッセイではなく学術的なアプローチを持った小論文を書くことができるように



なる。具体的には、学生は例として提示される文章の構造を分析し（モジュール化）、要約の練習を行う。この過程では文章構造において重要な接続詞についての理解と用法が強調され、論理的文章の作成技術が習得されていく。こうした作業を前提として、小論文作成に取り組む。そこでは対比的な視点を導入することによって文章に論理的一貫性と明確さを持たせることを意識した指導がなされる。また、こうしたモジュール化の手法は、アカデミック・ライティングだけでなく、学生が今後直面するであろう社会生活の諸相においても応用可能であることが、おわびの手紙などを例にとりあげられていた文章も厳選されており、論理的文章とは何かということが自然と理解されるような流れで教えられるこの指導法は、非常に興味深いものであった。

②事例紹介（薄井道正氏）

続いて、立命館守山中学校・高等学校教諭であり、2年前から立命館大学でも非常勤講師として教鞭をとっておられる薄井道正氏によって、立命館大学における特殊講義「学びのとびら・入門」（初年次日本語リテラシー科目）における取り組みが紹介された。「学びのとびら・入門」は、学生が読むこと・書くこと・考えることについて理解し、トータルとしての学ぶための技法を学



ぶ講義である。高校までの学びとは異なる、大学における学び、すなわち新たな知をもたらすことのできるような（研究に近い）学びの仕方について、(1)学びのための基本スキル（ノートテイキングや情報収集の方法など）、(2)ロジカル・ライティングとパラグラフ・ライティング、(3)批判的思考とデータに基づいた思考という3つの観点から説明があった。(2)のライティングに関するスキルについては、伝わる文章を書く際には、伝えるべき相手がいいて、それが誰なのか、そしてその相手が理解しやすい文章を書くことの意識付けが強調され、(3)については、ひとつの情報に依拠することなく、その情報の裏付け（論拠）はどこにあるのかを批判的に考えることの重要性について詳細な説明があった。具体例を豊富に織り交ぜながら紹介された氏の事例紹介は、文章がどのような要素・表現を持てば相手に伝わりやすいものになるのかを分かりやすく報告したものであり、参加者にとって大変有意義であった。

質疑応答では、2人の講演者に活発な質問が投げかけられた。

◇第Ⅱ部：テーマ別グループワーク

田川（京都大学、本WG）によってグループワークの進め方についての説明がなされた後、第Ⅱ部に入った。第Ⅱ部では、今年度初の試みとして、テーマ別にグループワークが行われた。テーマは、①論文指導、②作文法、③コピペ対策、の三つが設けられ、グループワークに先立ちそれぞれのテーマについて講師よりミニレクチャーが行われた（①論文指導「十字モデルで協同的に論文を考える」牧野由香里 関西大学総合情報学部教授、②作文法「科学的作文法入門」倉茂好匡 滋賀県立大学環境科学部教授、③コピペ対策「阪南



大学総合情報学部教授、②作文法「科学的作文法入門」倉茂好匡 滋賀県立大学環境科学部教授、③コピペ対策「阪南

大学コピペ検索システム」花川典子（阪南大学経営情報学部教授）。参加者は希望するテーマごとに3つの教室に計10グループに分かれ、グループワークを行った。グループワークでは、持参した資料にもとづいて各自が自身の実践を紹介し、それをグループで共有し議論した。また、議論した結果を90cm×120cmのポータブルなホワイトボードにまとめてもらった。興味のあるテーマ別にグループ分けをしたことにより、グループ内でよりスムーズかつ活発な議論ができたようであった。

◇第Ⅲ部：全体討論

第Ⅲ部の全体討論においては、安岡高志氏（立命館大学、本WG）による司会のもと、各グループで議論した論点がホワイトボードを用いながら報告され、これをふまえ参加者全員による全体討論がおこなわれた。10グループから出された論点は、全体のテーマである「ライティングの指導方法」とミニレクチャーのテーマとがあわさった中に出てきたものであった。主なものとしては、いかに論理的思考と書くことをつなげて指導するか、何を教えるべきか、専門が多岐にわたる学生にどのように指導をするのか、初年次教育における日本語科目と専攻科目とをどうつなげていくのか、評価をどう行うのか、コピペ問題を根本的に解決するにはどうしたよいか、などであった。

討論では、とりわけ一回生の指導について、初年次教育で行う場合に専門が異なる学部学科共通で行うことができるのか、という点が取り上げられた。何を書くことを教えるのか—「WhatとHow」という問い—は例年必ず話題に上がる論点であり、多くの教員が日頃から抱える疑問点である。今年はまだ、テーマ別グループワークにあったコピペについても活発な議論がなされた。具体的には、コピペを検出する以前にすべきこととして、学生にどのように倫理観を教えるのかについては、著作権・人権という話の中で他人の権利として教えているという事例が紹介された。また、これらすべての点について、教える側をどう組織するか、また評価基準をどう作成し共有していくか、という点も話題に上がった。

最後に、司会の安岡氏より締めくくりとして議論の整理とコメントが行われた。本日の議論を通して浮かび上がったライティング指導のポイントとして、安岡氏は以下の三点をあげた。すなわち、①どんなトピックを、誰にむけて書くのが重要であること、②指導方法がどうあるべきかについては、採点・添削を通した教員同士のコミュニケーションが必要であること、③採点・ルーブリックはどのように作成するべきなのかという課題があること、である。これらの論点は、来年度以降のWGの活動に活かしていきたい。

◆事後アンケート結果

ワークショップ終了後、「ワークショップ全体への参加満足度」「プログラムの有意義度（講演、事例紹介、テーマ別グループワーク、ミニレクチャー①・②・③）」について5件法（1：まったく満足していない／有意義ではなかった～5：非常に満足している・有意義だった）によりたずねたところ、それぞれの評定平均は4.4、4.3、4.4、4.2、4.3、4.7、4.7だった（回答者は順に44名、45名、45名、43名、17名、16名、7名）。全体的に参加者の満足度は高く、各プログラムの内容も有意義であったとの評価が得られた。

ワークショップに満足した理由をたずねたところ、「他大学の状況がわかったこと」「他

の先生の取り組みや工夫を知る事ができたこと」「授業に使える具体的なアイデアを得ることができたこと」「役に立つ今後につながる議論ができたこと」などがあげられた。さらに、ワークショップ参加による最大の収穫についてもたずねたところ、「各大学での具体的な取り組みをもとに議論を深めることができたこと」「情報の共有」「具体的な教授方法のアイデアが得られたこと」「文章指導の具体的なイメージを得られたこと」「多くの事例の収集と今後の本学における開発」など、共有することへの評価が高く、それが今後役に立って行くだろうという記述が多く見られた。

最後に、「今後に向けて改善したほうがいいと思われる点」をたずねたところ、グループワークに関する意見がいくつか寄せられた。とりわけ時間がタイトであったこと、全体の配分の中でもう少しグループワークの時間を増やせないかということ、などタイムスケジュールに関する指摘が多く見られた。また、実践で指導対象としている学生に違いがあることから、例えば留学生への日本語教育、レポート指導、などというようにグループワーク分けを実践の内容や対象によって行えないかという意見もあった。持参する資料について詳細な指示がほしいという意見や、あらかじめ課題を示しそれに従って実践例を整理してくるのはどうかなど、時間の制限がある中でテーマ別に効果的に使うための提案も見られた。

なお、本ワークショップの様子は、『京都新聞』（2012年2月29日付）で紹介された。

2-2. コミュニティ形成とリソースの蓄積

12月17日のワークショップで参加者に持参していただいた資料のうち、許可をいただいたものについては、スキャンし、整理・分類した上で、本協議会のウェブサイトにおいて実践事例集として公開した。資料の内容は多岐にわたっていたため、「学生のスキル不足」「指導の範囲」「初年次教育」「大人教授業・学生の多様性」「コピペ」「長期的育成」「授業構成」「評価・添削」「論理的・批判的思考力」の9つのカテゴリーに分けて掲載している。（http://www.kansai-fd.org/publications/resource/shiryo_20111217.html）

3. 2012年度活動方針(案)

3-1. 単行本の刊行

関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編

『思考し表現する学生を育てるためのライティング指導のヒント』（仮）

◆趣旨

過去4年間のシンポジウム・ワークショップの実績を踏まえ、講演と実践事例集の中から、いくつかライティング指導の実践のヒントになりそうなものを選び出し、冊子として刊行する。冊子は使いやすいサイズの薄めのものにし、ワークシートなどは、電子版を協議会のウェブサイト上にアップして、各大学や教員がカスタマイズして使えるようにする。（単行本とウェブサイトを連動させる。）

- ・体裁：約 120 頁 (B5 判) 40 字×32 行
- ・経費：経費のうち 50 万円を本 WG の予算から支出し、不足分は京都大学高等教育研究開発推進センターの文科省特別経費より当てる。
- ・出版元：まずは出版社にあたるが、無理なら自費出版とする。会員校には各 1 冊、無料配布する。

◆構成 (敬称略)

◇はじめに

- ・松下佳代・田川千尋・坂本尚志 (京都大学高等教育研究開発推進センター)：本書の成り立ちと関西 FD・FD 連携企画 WG の取組

◇ライティング指導のフレームワーク

- ・井下千以子 (桜美林大学)：Writing Across the Curriculum

◇レポート・論文の作成指導

- ・牧野由香里 (関西大学総合情報学部)：十字モデルで協同的に論文を組み立てる
- 【コラム】須長一幸・齊尾恭子 (関西大学教育推進部)：十字モデルを用いた初年次教育
- ・小田中章浩 (大阪市立大学文学研究科)：「モジュール」に基づいたレポート作成技法

◇初年次教育

- ・米山 裕 (立命館大学文学部)：初年次教育としての「リテラシー入門」と FD
- 【コラム】薄井道正 (立命館大学)：初年次日本語リテラシー科目
- ・森下育彦 or 谷美奈 (京都精華大学)：「日本語リテラシー」

◇学士課程を通じたライティング指導

- ・土井健司 (関西学院大学神学部)：専門教育・卒業論文につながる初年次教育
- ・高橋素子 (大阪河崎リハビリテーション大学)：読書感想文 (入学前教育) から臨床実習報告まで

◇卒論・ゼミ指導

- ・北野収 (獨協大学外国語学部)：自分のテーマを 2 年間かけて卒論に仕上げる

◇理系の文章指導

- ・倉茂好匡 (滋賀県立大学環境科学部)：科学的作文法入門
- 【コラム】矢野浩二郎 (大阪工業大学情報科学部)：大講義で書くことを通じて学ばせる
- ・岡田三津子 (大阪工業大学)：言語表現技術指導の組織的取組
- ・池田勝彦 (関西大学化学生命工学部)：工学系のためのライティング指導—導入教育から実験レポートまで

◇コピー問題とコピー対策

- ・杉光一成 (金沢工業大学)：「コピー」問題の本質
- ・花川典子 (阪南大学経営情報学部)：阪南大学コピー検索システム

◇おわりに

- ・安岡高志 (立命館大学教育開発推進機構)

◇資料編

- ・サイトへのリンク、執筆者の著作、文献ガイド

3-2. 関西 FD パイロット校の活動

昨年度の WG の議論により、新規に認定するパイロット校は、原則として、本 WG の現在のテーマである「思考し表現する学生を育てる」に即した FD 実践を計画している大学・学科等に限ることになった（それ以外の助言・支援は難しいため）。

ただし、大阪府立大学については、「IR (Institutional Research) にもとづく授業・カリキュラム改善、学士の質保証に関する支援」というテーマが重要であること、また、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一氏より助言・支援を得られることになったことから、パイロット校として認定することにした。

4. 予算

4-1. 支出

- ・冊子の刊行経費の一部として 50 万円

4-2. 収入

- ・なし

広報ワーキンググループ活動報告・活動方針案

1. 広報ワーキンググループ (WG) の目的と組織体制

1-1. 目的

広報 WG は、本協議会に関する広報業務をおこなう。具体的には、(1) ホームページおよびメーリングリストの維持・管理、(2) ニュースレターの発行 (年 2 回)、(3) 「FD 活動報告会」関連業務 (MOST 講習会の共催、報告書作成) を実施する。

1-2. 組織体制

広報部は以下のように構成されており、2012 年 4 月現在、部と WG の構成員は一致している (敬称略)。

- ・大阪市立大学 (大久保敦)・・・責任校
- ・和歌山大学 (伊東千尋)
- ・京都大学 (酒井博之、坂本尚志、吉田裕子)・・・連絡担当

2. 2011 年度活動報告

2-1. ニュースレターの発行

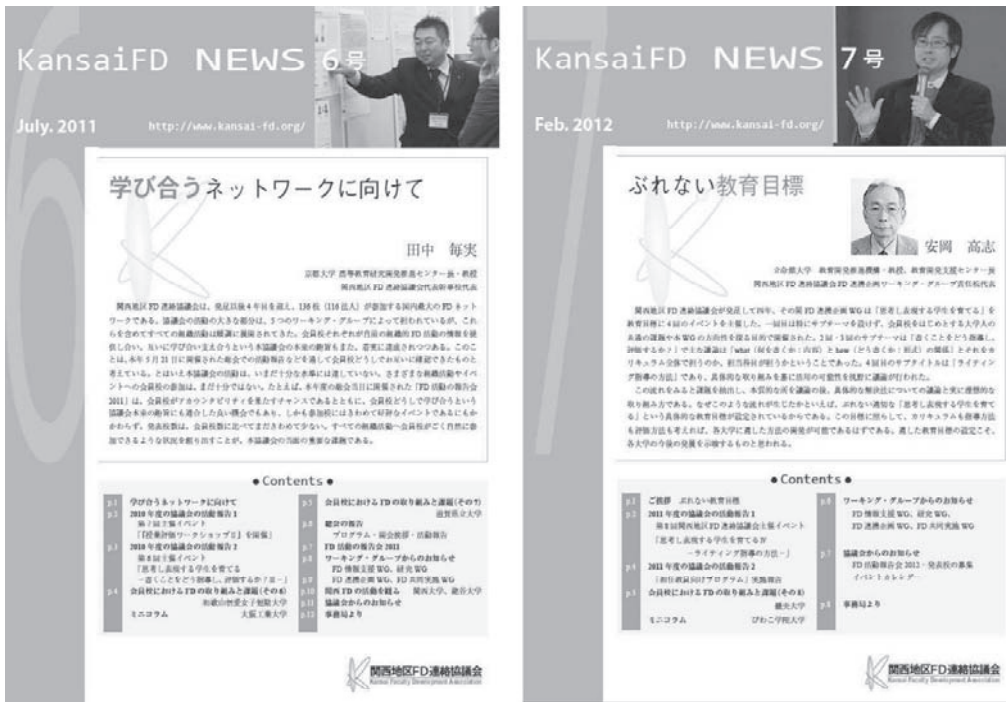
ニュースレターについては、第 6 号 (7 月、編集責任者：大久保敦)、12 月に第 7 号 (2 月、編集責任者：大久保敦) の 2 号を発行した (図 1)。900 部作成し、全会員校および原稿執筆者宛に送付した。非会員校についても入会を促すため各号 1 部を送付した。また、ニュースレターの PDF 版を協議会ウェブサイトへ掲載し一般公開した。

2011 年度は、これまでに協議会が企画・実施したイベント等の活動報告や、各 WG からのお知らせのほか、会員校間の FD 活動について情報共有を促進するため、個別の会員校における FD の取り組み紹介を充実させてきた。第 6 号 (タイトル：「学び合うネットワークに向けて」) では、第 4 回総会、本協議会主催イベントの報告に加え、和歌山信愛女子短期大学、大阪工業大学、滋賀県立大学、関西大学、龍谷大学より活動報告がなされた。また、総会と同日に開催された「FD 活動の報告会 2011」についての報告もなされた。第 7 号 (タイトル：「ぶれない教育目標」) では、FD 連携企画 WG、FD 共同実施 WG の活動報告のほか、畿央大学、びわこ学院大学より活動報告がなされた。

2-2. ウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理

関西地区 FD 連絡協議会のウェブサイト (<http://www.kansai-fd.org>) の維持・管理を随時おこなっている (図 2)。2011 年度は、ウェブサイトの継続的なコンテンツの更新をおこなった。

また、幹事校や各 WG および研究サブグループにおける連絡用、全会員校への案内用のメーリングリストを適宜作成、更新し、管理をおこなった。



(a) 第6号

(b) 第7号

図1 関西地区FD連絡協議会 ニュースレター



図2 関西地区FD連絡協議会 ウェブサイト

2-3. 「FD 活動報告会」 関連業務

2011 年度総会にて試行された「FD 活動の報告会 2011」の報告書を作成し、ニュースレター第 6 号と合わせて会員校に送付した（図 3）。また、今年度の「FD 活動報告会 2012」におけるポスター発表の原稿作成が「MOST」（<https://most-keep.jp>）を利用することが推奨されており、システム利用のための講習会を 3 月 2 日に共催した。MOST 講習会のプログラムを資料に示す。

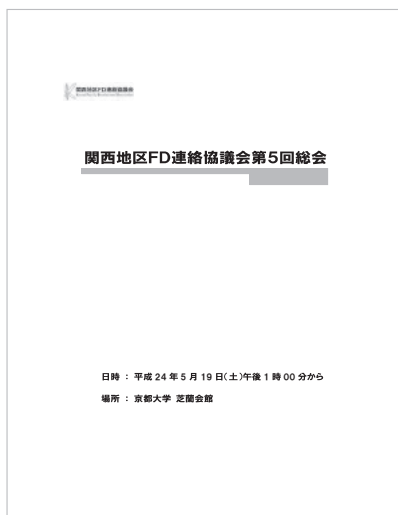


図 3 「FD 活動の報告会 2011」 報告書

3. 2012 年度活動方針案

3.1 ニュースレターの発行

本協議会のニュースレターを 2 度発行する。前年度に引き続き、関西 FD における活動報告のほか、会員校で実施されている FD の取り組み紹介の充実を図る。

・第 8 号（7 月頃）

内容（案）：2012 年度総会報告、協議会活動報告、会員校取り組み紹介など

※「FD 活動報告会 2012」の報告書を同封する予定

・第 9 号（1 月頃）

内容（案）：協議会活動報告、会員校取り組み紹介など

3.2 ウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理

前年度に引き続き、協議会のウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理をおこなう。

3.3 「FD 活動報告会」 関連業務

2012 年度の総会と合わせて開催される「FD 活動報告会 2012」の報告書を作成し、ニュースレター第 8 号に同封し、会員校に送付する。また、翌年度の報告会のための MOST 講習会を京都大学と共催する。

4. 2012年度予算(案)について(別紙参照)

◆2012年度予算(案) 890,520円

1) ウェブサイト関連

- ・ドメイン維持費 年額 4,620円
- ・サーバー維持費 年間 50,400円 (@4,200円×12ヶ月)

2) ニュースレター関連

- ・総会のテープ起こし、要約費 26,500円 (総会議事要約含む)
- ・ニュースレター6号印刷費 190,000円 (12頁、900部)
- ・ニュースレター6号発送費 52,000円 (メール便)
- ・ニュースレター7号印刷費 165,000円 (8頁、900部)
- ・ニュースレター7号発送費 52,000円 (メール便)

3) 「FD活動報告会」関連

- ・報告会報告書作成費 350,000円

以上

MOST 講習会

日 時：2012年3月2日（金）14:30～17:00

場 所：京都大学吉田南1号館 1共23教室（下記の会場地図参照）

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

共 催：関西地区FD連絡協議会 広報WG

概 要

来る5月19日開催の関西地区FD連絡協議会第5回総会では、会員校のFD活動に関わる報告を、ポスター発表の形式で実施する「FD活動報告会2012」が予定されています。会員校のFD活動をオンライン上で共有・蓄積するために、ポスター発表の原稿は“MOST”と呼ばれるオンライン・システム (<https://online-tl.org/>参照) で作成するとたいへん便利です。本講習会は、関西FD会員校の教職員を対象に、総会での発表原稿を実際にMOSTを利用して作成するものです。本協議会会員校に所属する教職員の方はどなたでも参加できます（ただし1法人につき2名まで）。ふるってご参加下さいますようお願いいたします。

※MOST (Mutual Online System for Teaching & Learning : モスト) は、大学教員の教育研修のためのオンライン支援システムです。

参加条件：関西地区FD連絡協議会会員校に所属する教職員。5月19日開催の本協議会総会において、ポスター発表をおこなう会員校を優先します。定員は30名。

※PC操作をおこないますので、実際にMOSTを利用される教職員のご参加を推奨します。

※できましたら各自ノートPCをご持参下さい。貸出用のノートPCも準備しております（先着順）。

講習会参加にあたって：参加される方は、講習会当日、「発表原稿に用いる予定のテキストや図表などの電子データ」をご持参下さい。事務局でもテスト用の画像やテキストを準備しますが、ポスター作成を効率的に行うため、できる限りデータをご持参下さい。

また、可能であれば「取り組みに関連する画像データ」「貴学／貴部局のロゴマーク」もご持参下さい。

※参考（作成原稿イメージ）：<https://online-tl.org/keep25/toolkit/html/snapshot.php?id=33695268103569>

参加費：無料

参加方法：下記の関西地区FD連絡協議会ウェブサイトから、「FD活動報告会2012」の申込みフォームをご利用下さい。

申込みフォーム：<http://www.kansai-fd.org/peer-review2012.html>

※MOST講習会のみ参加を希望される方は、以下の問い合わせメール宛に個別にご連絡下さい。講習会の内容はポスタ

一原稿作成向けに構成しておりますので、その点ご了解下さい。

問い合わせ先：peer-review@kansai-fd.org（担当：酒井）

プログラム

- 14:00 受付開始
- 14:30 趣旨説明、MOST・KEEP Toolkit の概要説明
- 14:40 操作説明
- 15:20 参加者によるスナップショット[※]作成
- 17:00 終了

※「スナップショット」とはMOST内のKEEP Toolkitを利用して作成したコンテンツを指します

会場地図：京都大学 吉田南1号館 1 共2 3 教室（吉田南構内）



以上

研究ワーキンググループ(WG)2011 年度活動報告

・2012 年度活動計画(案)

研究ワーキンググループ (WG) は、2011 年度、関西地区 FD 連絡協議会第 4 回総会 (5 月 21 日) において承認された今年度の活動方針に基づいて、主として二つの研究サブグループ (SG) を中心に活動を行った。その二つの研究 SG は、「FD メディア研究 SG」(主査校:大阪成蹊大学)、「FD デザイン研究 SG」(主査校:神戸大学)である。「授業型学生支援研究 SG」は、年度途中で主査の異動があり、やむなく休会となった。また、「授業評価研究 SG」(主査校:神戸大学)も、本年度は研究会合をもっておらず、来年度からは「FD デザイン研究 SG」の一つの課題として取り組む形で進めていくことを検討中である。なお、研究 WG、各研究 SG の活動等については、関西地区 FD 連絡協議会の各 WG の活動に関するホームページ (<http://www.kansai-fd.org/wg/>) に掲載されている。

1. FDメディア研究SG

FD メディア研究 SG は、出欠確認研究 SG から名称を改めて 2 年目を迎えた。2011 年度に実施した 4 回の研究会の他、Saai-MAS による携帯電話を利用した授業評価アンケート、出欠確認見学会などの概要を紹介する。

1-1. 第1回会合 (通算13回会合)

(a) 開催概要

日 時: 2011 年 6 月 30 日 (月) 17:30~19:30

場 所: 内田洋行大阪支店

参加校・企業: 11 校、3 企業、27 名

(b) 議 事

(1) 関西医療大学での Saai-MAS テスト導入報告

関西医療大学より、Saai-MAS テスト導入から現在までの経過の報告があった。テスト導入時のトラブル、本番導入時の履修登録ミスなど、Saai-MAS テスト導入体制の改善点や今後テスト導入・本格導入する大学の指針となる内容であった。

(2) 京都光華女子大学の教育/学習支援システムについて

京都光華女子大学より、京都光華女子大学の教育/学習支援システムの紹介があった。光華 navi (学内や自宅からインターネットを通じて学生一人ひとりの大学生活をサポートするさまざまな情報にアクセスできるポータルサイト) について、出欠管理からポートフォリオまでビデオを交えた報告があった。C-Learning、クリッカー、文部科学省から採択された GP、その他補助事業の報告があった。

(3) 大阪商業大学における Saai-MAS の導入状況

大阪商業大学より、大阪商業大学での出欠確認システム導入の経緯、導入の目的、Saai-MAS 運用のガイドライン、Saai-MAS 運用状況、出席データの FD への活用、今後の課題などの報告があった。

(4) 主査校提案

分科会について、提案資料が大阪成蹊大学から配布され、設立について提案があった。特に反対はなく、2011年度の分科会テーマを「授業アンケートの集計／グラフ化／帳票化」とし、今後メーリングリストで授業アンケートに必要な集計結果、グラフ、帳票の収集を呼び掛けることとなった。

産学連携を意識して、Saai-MASをテスト導入もしくは本格導入する場合は、青森共同計算センター → 内田洋行 → 導入大学のルートを最優先で検討してほしい旨の提案があった。Saai-MASの導入で最も大事なことが、使いこなす技術であり、テスト導入・本番導入を成功させるための導入技術（ノウハウ）、導入後1年、2年、3年、4年と順次活用範囲を広め効果を引き出すための運用技術である。導入校に対してこれらを支援するのがFDメディア研究サブグループの活動であるが、FDメディア研究サブグループに属さない企業が導入校と青森共同計算センターの間に入れば、守秘義務が発生し、これら支援ができなくなるために提案された。主査校の経験では、この場合テスト導入すらできなかったため、このような提案がなされた。

(5) 次回(第14回)会合

日 時：2011年9月上旬～中旬

発表校：京都光華女子大学

場 所：京都光華女子大学

(6) 次回以降会合発表校

2011年度12月、2月発表を大阪樟蔭女子大学、藍野大学に検討いただくことになった。

2012年度第一回目の発表を奈良文化女子短期大学に検討いただくことになった。

1-2. 第2回会合（通算14回会合）**(a) 開催概要**

日 時：2011年9月14日（月）16：30～18：50

場 所：京都光華女子大学

参加校・企業：10校、2企業、17名

(b) 議事

(1) 京都光華女子大学の教育／学習支援システムについて

全員で光華naviを見学した後、京都光華女子大学から以下の発表があった。

- ・教育／学習支援システムについて
- ・出席確認システムについて
- ・出欠システムの運用について
- ・光華エンrollmentにおける出席データの活用について

(2) その他事務局より

「授業アンケートの集計／グラフ化／帳票化」の分科会は、資料等の収集が進まないこともあり、今年度の開催は難しいことが報告された。

Saai-MASをテスト導入する場合の基準を設けること、その基準は、今後参加する大学から適応することが提案された。基準についてはこれから検討する旨報告があった。

(3) 次回(第15回)会合

日 時：2011年12月上旬～中旬

発表校：藍野大学
場 所：大阪成蹊大学

1－3. 第3回会合（通算15回会合）

(a) 開催概要

日 時：2011年12月9日（金）16：30～18：50
場 所：大阪成蹊大学相川キャンパス
参加校・企業：12校、5企業、24名

(b) 議事

(1) 藍野大学のFDの現状

藍野大学から以下の発表があった。

- ・大学概要
- ・FD活動の背景
- ・主なFD活動
- ・その他のFD活動
- ・FD活動の今後
- ・Saai-MAS導入について
- ・授業アンケートの現状
- ・授業アンケートの展望
- ・出欠管理の現状
- ・出欠管理の展望
- ・実習科目の現状

(2) 帝塚山大学におけるSaai-MASのテスト導入経緯

帝塚山大学から以下の発表があった。

- ・システムリプレイス（2013年）の検討の一環
- ・本学での出席管理状況
- ・テスト導入までの経緯
- ・学内での合意形成
- ・テスト導入実施
- ・実施概要
- ・今後の予定

また、基幹システム等大学全体の情報化とSaai-MASの関連について発表があった。

(3) その他事務局より

Saai-MASの授業アンケート、参観報告、出欠確認、簡易アンケートなどの機能紹介があった。

Saai-MASをテスト導入、本格導入する場合の考え方として次の提案があった。

- ・導入大学と内田洋行、青森共同計算センター、FDメディア研究サブグループが「友達関係」を構築し、お互いを支援し合うことが最もテスト導入を成功させ、結果的に導入校にとってもメリットが大きい。
- ・テスト導入は「Saai-MASのどこが悪いのか、一つでも多く悪いところを探して導入を否定する」傾向になりがちであるが、その逆の取り組みが提案された。「Saai-MASを導入して成功するためにはどうすればいいか、使える機能は何か、効果を引き出すためにはどうすればいいか」という考え方で臨むほうが、結果的に導入を成功に導けるという提案があった。

(4) 次回(第16回)会合

日 時 : 2012年2月24日(金)

発表校 : 関西大学

場 所 : 関西大学

(5) 次々回(第17回)会合

日 時(仮) : 2012年5月

発表校 : 奈良文化女子短期大学

1-4. 第4回会合(通算16回会合)**(a) 開催概要**

日時 : 2012年2月23日(木) 16:30~18:50

場所 : 関西大学 IT センター 4階多目的会議室

参加校・企業 : 11校、4企業、26名

(b) 議事

(1) 関西大学のIT化の現状と、教育の質保証に向けた取り組みの必要性について

関西大学 IT センター得永義則氏から以下の発表があった。

- ・全学 IT トータルシステム全体概要
- ・大学における ICT 活用の変遷
- ・教育の質保証に向けて
- ・eポートフォリオに求められる機能
- ・関西大学における eポートフォリオの取り組み
- ・関西大学の eポートフォリオの現状
- ・統合ポートフォリオシステム
- ・KUE ポートフォリオシステム
- ・OSL(Oracle Student Learning) システム

(2) その他事務局より

Saai-MAS の出席機能を応用したポートフォリオについて簡単な報告があった。

来年度の会合について、①5月の会合は関西地区FD連絡協議会の総会と同時期になるので変更したい、②大阪成蹊大学での授業アンケートおよび出欠確認の見学会と会合を同時開催したいという要望が提示された。

(3) 次回(第17回)会合

日 時 : 2012年6月上旬(見学会との同時開催を予定)

発表校 : 奈良文化女子短期大学

場 所 : 大阪成蹊大学相川キャンパス

1-5. 「携帯電話での授業評価アンケート、出欠確認」見学会

前期2回、後期3回の「携帯電話での授業アンケート、出欠確認」見学会を行った。

前期は、5月31日(火) 12:45~14:20、6月7日(火) 12:45~14:20、大阪成蹊大学相川キャンパスにて実施した。5月31日は3大学から5名、6月7日は3大学、1企業から7名の参加

があった。1時間20分の予定が、質疑応答、実施したアンケートと出欠確認結果の画面での確認と説明等、結果的に時間が足りなくなるほどの熱心な見学会となった。

後期は、11月16日(水)12:40~14:20、11月21日(月)10:00~11:40、11月22日(火)12:40~14:20、大阪成蹊大学相川キャンパスにて行った。11月16日は1校から2名、11月21日は午前中に4校1組織7名、午後に2校1企業から3名の参加があった。いずれも、①携帯電話システム、授業アンケート、出欠確認に関する事前説明(20分)、②授業アンケート、出欠確認の見学(20分)、③質疑応答他(30分)、④希望者のみ：見学した授業アンケート結果の閲覧(30分)という流れで実施した。

2. FDデザイン研究SG

2-1. 第1回会合

研究WG・FDデザイン研究サブグループ(以下SG)は、2011年11月28日(月)午後4時30分~6時30分、京都大学吉田南1号館共106室において、本年度の第1回会合を、公開研究会として実施した。公開研究会の話題提供は、FDデザイン研究SGメンバーの滋賀県立大学倉茂好匡教授に、先生に『滋賀県立大学方式の「授業の基本」研修会と授業コンサルテーション』として題してお願いした。

倉茂先生は、滋賀県立大学において、ワークショップ『授業の基本』を実施してきており、また、平行して、教育実践支援室を通して、希望する教員には、授業コンサルテーションも行ってきておられる。それらの取り組みを総合して、滋賀県立大学のFD活動は進められており、それらの取り組みの概要を紹介していただき、FDをデザインするという視点から、FDのあり方について議論する場として今回の研究会が企図された。「授業の基本」は、既に、関西FDのFD共同実施WGを通じて、他大学の方にも開放されており、実際にそのワークショップに参加された方も含めて、12大学16名の参加があった。

まず、FDデザイン研究SGの主査である神戸大学の米谷淳教授より挨拶があり、サブグループの趣旨と今回の第1回会合の進め方についての話があった。

続く公開研究会において、倉茂先生から、「授業の基本」のワークショップの一部を実演も交えて紹介していただき、また、コンサルテーションの実際についても具体的な事例を紹介いただいた。倉茂先生の話提供は、味噌汁の作り方などの具体例を取り上げたり、また、問いかけなどによる双方向のやりとりも交えたり、ふだんのワークショップの雰囲気も感じながら、時間を感じさせない興味深いものであった。話題提供終了後、FDのあり方についても熱心な質疑応答が行われた。

その後、京都大学高等教育研究開発推進センターで企画している「FD実態調査」について、京都大学の太塚雄作教授より説明があり、質問項目やアンケート対象、調査方法などについて、メーリングリストで意見を聞く形で、調査への協力が求められた。調査は2月頃に実施する予定である。

予定時間をオーバーした終了となったが、その後も、参加者同士の情報交換が行われるなど、大学を超えた教職員の交流の場として、関西FDの特長も感じられる有意義な会合となった。

3. 研究WGの2012年度の活動計画(案)

(1) 研究WGの活動方針

- 昨年度実績に鑑み、本年度は、「FDメディア研究SG」、「FDデザイン研究SG」の二つのSGにおいて、共同研究活動を推進する。研究WGは、その活動に必要な

支援を行う。

- 各研究 SG の活動内容は、関西 FD のホームページに掲載すると共に、公開研究会や大学教育研究フォーラム（京都大学）の場などを利用して、共有を図る。
- 本年度は、特に新規の SG を作ることはしないが、新規 SG の立ち上げ希望も含めて、総会終了後、早い時期に、研究 SG への参加募集案内を、関西 FD のメーリングリストを通じて行う。

(2) 「FD メディア研究 SG」の計画案

- SG 研究会を 5 回程度開催すると共に、ケータイ等を利用した授業アンケート、出欠確認の見学会を実施する。
- ケータイによるアンケートシステム（Saai-MAS）の共同利用のために、そのモニター利用料（雑役務費）を必要とする。
- 会合開催費（資料代・お茶代）等の会議費を必要とする。

(3) 「FD デザイン研究 SG」の計画案

- SG 研究会を 2～3 回程度開催する。また、大学教育研究フォーラムなどのラウンドテーブルなどで、研究成果の一端を報告する。
- FD の評価（授業評価を含む）や成果の検証やティーチング・ポートフォリオについて FD のデザインやコンセプトとあわせて検討し、その成果を来年 3 月に京都大学で開催される大学教育研究フォーラム等で報告できればと考えている。

(4) 研究 WG の予算案

- 会合開催費（資料代・お茶代）、および、講師謝金・旅費を必要とする。会議・研究会等 10 回程度の会議費（5,000 円×10 回＝50,000 円）、外部講師招聘 3 名程度（旅費＝50,000 円×3・謝金約 36,000 円×3＝258,000 円）、Saai-MAS システム利用費（100,000 円）、計 408,000 円。

III-2. FD 活動報告会 2012

2012年5月19日（土）、関西地区FD連絡協議会第5回総会において、会員校で組織的に取り組まれているFDや教育改善の活動についてポスター発表の形式で情報交換をおこなう「FD活動報告会2012」が開催された（写真1、資料1）。本報告会は、一昨年度の試行を含めると3度目の開催である。初年度は幹事校を中心に17件、昨年度は12件の発表があったが、今年度の発表校数は17の会員校から20件の発表があった。また、今年度はFD共同実施ワーキンググループから「初任教員向けプログラム（通称：カンジュニ）」に関する発表もおこなわれた。これまでと同様、約1時間にわたり報告会の開始から終了まで活発な意見交換がおこなわれた。



写真1 「FD活動報告会2012」の会場の様子

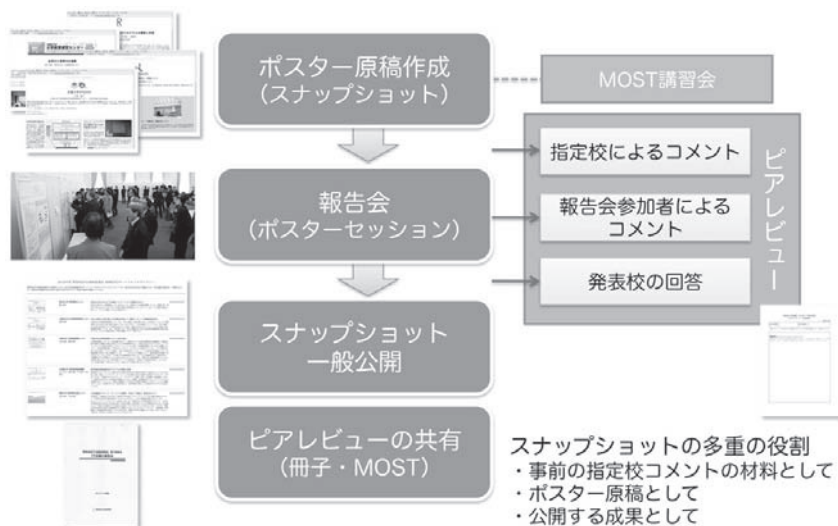
本報告会は、以下に述べるようなねらいが含まれている（図1、資料2）。まず、各会員校で取り組まれている組織的なFDや教育改善の活動の情報交換の場を本協議会の公式の活動として設けることである。これをポスターセッションの形式で実施している。年に一度、各会員校の活動成果について共有する場を設けることは、発表校にとっては組織の取り組みのアピールの機会となるとともに、会員校からの意見や助言などを得る機会ともなる。また、総会への参加校にとっても他の会員校の取り組みを担当者から直接説明を受け、そのノウハウを自身の組織の活動に活かす機会である。このように、FDに関する互助組織としての本協議会の特徴を反映させた活動といえる。

次に、各ポスター発表の内容に対し、会員校がコメントを付けるピアレビューをおこなっている。ポスターの作成者には、あらかじめポスター上に「取り組みの視点」「コメントが欲しい点」を記述するよう依頼しており、他者がポスターを読む際の視点を与えるようにした。このピアレビューで

は、ポスターの原稿を総会までに会員校に読んで貰い、事前にコメントを作成し提出してもらう「指定校用コメントシート」と、総会の参加者が報告会の場で自由にコメントを付ける「一般用コメントシート」を準備した。前者は、発表校につき3校の指定校にコメントを依頼し、総会に出席不可能である場合などを除き多くの会員校からの同意があった。結果として、ほぼすべての発表に対して指定した会員校からのコメントが提出された。このようなコメントを簡潔な文書として交換し、さらに会員校間で共有することで、FDに関して抱える課題や評価の視点を相互に強化することができると思われる。このピアレビューの実施は、本協議会の大きな特徴であり、他に例を見ないものである。

ポスターの原稿は、MOST を利用し、KEEP Toolkit を使ったスナップショットとしてオンライン上で作成することが推奨された。従来と同様、ほとんどの発表校がMOST を利用して原稿を作成し、これ以外の発表原稿と合わせて一覧にしたものを、協議会の成果としてウェブ上で対外的に発信した（図2）。下記の URL から各ポスターにアクセスできる。なお、ピアレビューのコメントについては、会員校の共有財産として冊子および会員校の教職員のみがアクセスできるオンラインコミュニティ内で公開されている¹。これを毎年継続することで、会員校のFDの取り組みを網羅することを目標としている。また、これらを互いに関連づけたり分類したりして提示することで、同様の取り組みをおこなっている会員校同士をつなぎ合わせ大学間連携などに発展する可能性もあると考えている。さらに、協議会全体の成果としてウェブ上で発信することは、社会に対する説明責任を示すことにもなるだろう。

<https://most-keep.jp/keep25/toolkit/html/gallery.php?id=307031676459156>



関西地区 FD 連絡協議会 第 5 回総会

日 時：2012 年 5 月 19 日（土）13:00～

場 所：京都大学芝蘭会館

プログラム

13:00 総会（稲盛ホール）

14:45 ポスターセッション「FD 活動報告会 2012」（山内ホール）

16:00 活動報告（稲盛ホール）

17:15 情報交換会（山内ホール）

FD 活動報告会 2012 関連スケジュール

2012 年

- 2 月 ニュースレター7号発行（発表校の参加受付開始）
- 2月24日（金） 参加受付締め切り（3月23日（金）に延長）
- 2月24日（金） MOST 講習会参加者に MOST アカウント発行
- 3月2日（水） MOST 講習会（於：京都大学）
- 4月20日（金） 幹事校会議（ポスター発表校、ピアレビュー担当校の承認）
- 4月27日（金） 発表原稿提出締め切り
- 5月7日（月）～ ピアレビュー担当校に発表原稿、コメントシート記入要領を通知
- 5月19日（土） 総会「FD 活動報告会 2012」
- 6月1日（金） 発表者からの回答コメント締め切り、冊子化用原稿の修正期限
- 6月中旬 MOST 上での共有化、関西 FD の HP からリンク
- 7月初旬 冊子を会員校に配布

III-3. FD 共同実施ワーキンググループ

FD 共同実施ワーキンググループは、初任者研修共同実施の企画立案をはじめ、会員校が共同で実施する活動を行っている。ワーキンググループの構成は、今年度は特に変更を行わず、大阪大学（常任幹事校）、関西学院大学（幹事校）、京都大学（代表幹事校）を FD 共同実施部とし、ワーキング加盟大学は、昨年度の継続とした。

1. 活動目的

2012 年度 FD 共同実施ワーキンググループの活動目的は昨年度に引き続き、以下の 2 点である。

1. 「初任教員向けプログラム」（通称：カンジュニ）を実施すること。
2. 単独では FD 研修会の開催が困難な大学に対して、研修会開催に向けた様々な支援を行うこと。

2. 初任教員向けプログラムについて

「初任教員向けプログラム」とは、現在、関西 FD 加盟校で実施されている研修会のうち「大学の所属に関係なく、大学初任教員であれば参加して効果が見込まれる」ものを公開してもらい、それを関西 FD 認定プログラムとするものである。関西 FD では、研修マトリックスを作成、周知することによって、各大学の研修会を相互利用できる機会を提供する（図 1）。

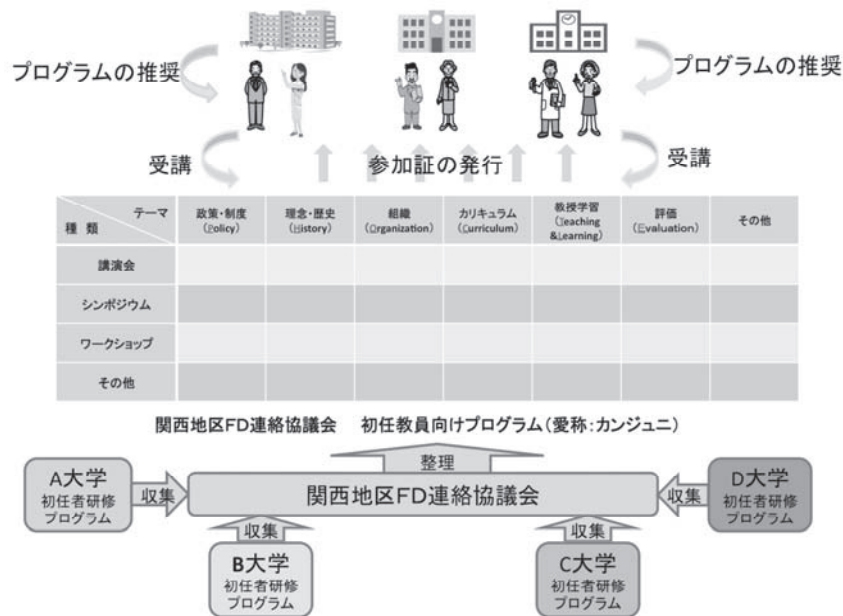


図 1. 初任教員向けプログラムの概略

今年度は、広くこの制度を案内するためのポスターを作成し、会員校に配布した。それぞれのプログラムやその概要については、ウェブページに随時掲載していることから、ウェブページへの誘導、新規に開設された「関西地区 FD 連絡協議会」メーリングリスト（加盟大学の教

職員であれば誰でも参加できる)への登録を案内することを意図して作成した。

3. 2012 年度の活動報告

3-1. 初任教員向けプログラムの実施

2012 年度の初任教員向けプログラムは 9 回 (うち、2012 年 12 月現在で 8 回実施済み) であり、4 校が自校の研修会を公開した。以下に、実施済みのそれぞれの研修会の様子について、関西地区 FD 連絡協議会ホームページに掲載されている各大学からの報告を転記する (一部筆者による修正あり)。

(1) 2012 年 3 月 27 日(火) 大阪大学

「対話授業とは何か」 関西 FD からの参加者：6 名

大阪大学豊中キャンパススチューデント・コモンス (教育研究棟 I) 2 階・セミナー室 I において、本協議会共催の第 6 回大阪大学新任教員研修が開催された。

本研修は 2 部構成となっており、第 I 部は大阪大学の新任教員の方々向けの研修会であった。本協議会の共催事業は、第 II 部の平田オリザ教授 (大阪大学コミュニケーションデザインセンター) が講師をされた「対話型授業とは何か」であり、大阪大学の新任教員が 12 名、関西地区 FD 連絡協議会加盟校からは 6 名の合計 18 名の参加者となった。

研修会は、劇作家・演出家である平田オリザ教授によってワークショップ形式で進められた。「コミュニケーションデザイン」という視点から、学生参加型・双方向型の授業を行う上で有用な視点を提示するという目的で行われたこの研修では、冒頭で企業採用においてコミュニケーション能力が重視されていることが示されたのち、授業への導入ゲームや企画、ロールプレイに全員が参加し、それがコミュニケーションとどのように関係しているかを体験した。そして、コミュニケーションやその教育について注意すべき点などについてレクチャーを受けた。質疑応答時には多数質問がなされ、参加した各自が応用できる多様なヒントを得ることができる内容だったと考えている。

事後アンケートでは、関西 FD 連絡協議会からの参加者、5 名が「自分の授業改善の参考になった」、残りの 1 名が「大学として『コミュニケーション』にどう取り組むべきか参考になった」と回答しており、全員から肯定的な回答を得ることができ、有用な情報を伝達できたのではないかと考えている。

(2) 2012 年 5 月 6 日 (火) 滋賀県立大学

「授業の基本」ワークショップ 関西 FD からの参加者：12 名

滋賀県立大学で「授業の基本と授業づくり」ワークショップが開催された。講師は滋賀県立大学教育実践支援室長の倉茂好匡先生である。研修会の構成は以下の通りである。

第 1 講 10:10～12:10 授業の基本①ー基本の基本ー

第 2 講 13:10～15:10 授業の基本②ー授業展開上の畏ー

第 3 講 15:25～17:45 授業づくりワークショップ

(3) 2012 年 5 月 25 日 (金) 滋賀県立大学

『授業の方法ー入門編 2：数式を扱う授業のためにー』 関西 FD からの参加者：9 名

滋賀県立大学で「授業の方法－入門編②：数式を扱う授業のために－」が開催された。講師は滋賀県立大学教育実践支援室長の倉茂好匡先生であり、開催時間は18:30～20:20であった。

(4) 2012年6月22日（金）滋賀県立大学

「授業の方法－入門編3：視聴覚教材を用いる授業のために－」ワークショップ 関西FDからの参加者：5名

滋賀県立大学で「授業の方法－入門編③：視聴覚教材を用いる授業のために－」が開催された。講師は滋賀県立大学教育実践支援室長の倉茂好匡先生である。

(5) 2012年7月27日（金）滋賀県立大学

ワークショップ「授業の方法－入門編4：授業に学生を『参加』させるには－」関西FDからの参加者：13名

滋賀県立大学で「授業の方法－入門編④：授業に学生を『参加』させるには－」が開催された。講師は滋賀県立大学教育実践支援室長の倉茂好匡先生である。

(6) 2012年9月10・11日（月・火）関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

「大学教員のための『講義方法ブラッシュアップ』」 関西FDからの参加者：1日目10名、2日目7名

本研修会は、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで倉茂好匡氏（滋賀県立大学環境科学部教授・教育実践支援室長）を講師に迎え、「大学教員のための『講義方法ブラッシュアップ』」のワークショップが開催された。

本ワークショップは、専任教員・非常勤講師及び大学で講義担当を目指す大学院生等を対象としたもので、1日目のみ、2日間連続参加の選択が可能で、発声、板書、立ち位置といった基本的なことから、授業構成、発問、教材研究といった内容について実習を交えて、「講義方法のブラッシュアップ」を行うことを目的としている。

◆9月10日（月）

講義「基本の基本」

講義「授業展開で陥りやすい罠」

ワークショップ「教材研究」

◆9月11日（火）

講義「発問法、アクティブラーニング法」

グループワーク「授業の完成」

授業発表会

(7) 2012年9月26日（水）大阪大学

「大阪大学ファカルティ・ディベロップメント研修」 関西FDからの参加者：1名

大阪大学豊中総合学館において、大阪大学ファカルティ・ディベロップメント研修が実施された。大阪大学では初任教員のみならず全教員が対象となっており、今回は120名ほどの教員の参加があった。

本研修は二部構成となっており、第一部では「教育から学習へ：主体的な学びを重視した大学教育への転換を求めて」と題し、川嶋太津夫教授（神戸大学大学教育推進機構）の全体講演

ならびに「個人情報保護」に関して尾山理事（大阪大学）の研修が行われた。第二部では3つの分科会があり、それぞれ A「新しい TA 制度について」・「能動的学修について」、B「共通教育賞受賞者による模擬授業（ICT を用いた授業の取り組み）」「授業支援システム（WebCT）について」、C「学生相談室から見た阪大生」の講演・議論が行われた。

第一部の全体講演では、大学の教育のあり方として、従来の教員が「教える」形態から学生自らが「学ぶ」形態への移行が重要であることを中心に、カリキュラムマップの作成、各授業において「学習目標（成果）」の設定、アセスメントの重要性、ルーブリックの活用などの詳細についても紹介された。個人情報保護に関しては、過去の事例を挙げ、学生の成績等の個人情報を守るために必要な方法を紹介された。第二部の分科会では、A 会場では、従来の TA 制度から目的・能力に従って細分化された新 TA 制度の導入についての説明があった。また、医学部で取り組んでいる能動的学修プログラムの報告があった。B 会場では、教育学習支援として ICT の活用の実践例および WebCT の利用に関する研修が行われた。C 会場では、学生の教育・指導におけるメンタルケアの必要性・対処、ハラスメントの防止・対策についての研修が行われた。いずれの研修においても、初任教員に限らずすべての大学教員に必要なものとなった。また、他大学の初任教員のみならず、FD 担当教員やベテラン教員にも、教員スキルアップとなるものであった。

(8)2012 年 10 月 10 日(水) 京都大学高等教育研究開発推進センター 関西 FD からの参加者：21 名

京都大学百周年時計台記念館・国際交流ホールにおいて、京都大学高等教育研究開発推進センター主催、関西地区 FD 連絡協議会共催のもと、第 84 回公開研究会「ピア・インストラクションによるアクティブラーニングの深化」が開催された。

研究会には、学内外の大学関係者および学生等、計 113 名の参加者（うち、関西地区 FD 連絡協議会加盟校参加者 21 名）の参加があった。

第一部基調講演では、エリック・マズール氏（ハーバード大学教授）より、ピア・インストラクションの概要を、自身における物理の授業を例に解説された。

ピア・インストラクションとは、学生同士の議論を組み込んだアクティブラーニング型授業の一つで、ConcepTest と呼ばれる課題を与え、クリッカーを使って個々の学生の理解度を測るとともに、学生同士の議論を通じて、授業への認知的・感情的な参加を促しながら、基本的な概念についての深い理解を目指した。

第二部のパネル・ディスカッションでは、ピア・インストラクションの事例報告として溝上慎一氏（京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授）が自身の心理学の授業における実践を報告した。

続いて松下佳代氏（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）がアクティブラーニングをめぐる問題点を整理し、外的にアクティブだけでなく内的側面でもアクティブであることの重要性を強調するとともに、ディープ・アクティブラーニングの提案を行い、飯吉透氏（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）からは、このような教育イノベーションを普及、持続、発展させていくために、集合的文化の醸成とそれに基づく教育知コモンズの構築の重要性が強調された。

最後にマズール氏より、このような授業法を定着させるのもう一つ重要な点として、評価の方法を変えていくことの意義が指摘された。フロアとも活発な意見交換が行われ、ピア・インストラクションの大きな可能性を感じさせる会となった。

事後アンケート（72名より回収）では有益だったプログラムが何だったかを回答してもらったところ（複数回答可）、エリック・マズール氏の講演について69名が有益だったとの回答をし、非常に高い評価を得た（次いで松下佳代氏によるパネル発表：44名、マズール教授のコメント37名）。自由回答では、マズール氏の講演内容が高く評価されただけでなく、ピア・インストラクションの手法を取り入れ、参加者が実体験出来るようにしていたという講演手法についても高く評価する声が多く見られた。

また、全体を通し、ピア・インストラクションの利点、課題点の両方を理解でき、有意義だったとの意見があった。自分の講義でも実践してみたいという声も多く、この授業方法についてそれぞれの専門教科でどのように取り入れていくかについて、考える機会を参加者に提供することができた。

(9) 2013年1月9日（水）10日（木）滋賀県立大学

『科学的和文作文法講座 公開授業・検討会－卒業論文等の作文指導で悩んでいる先生方のために－』

3-2. 初任教員向けプログラムに対する参加者の評価

初任教員向けプログラムに参加した、関西地区FD連絡協議会加盟校の教職員に対して、事後アンケートを実施した。実施は(1)「対話授業とは何か」から(7)「大阪大学ファカルティ・ディベロップメント研修」の7回の研修会で行われ、合計29名がアンケートに回答した。以下に、アンケートの回答を示す(欠損値あり)。質問4~8については、自由記述によるアンケートであったため、回答を内容ごとに整理し、それぞれの内容についての記述例を紹介する。

質問1.あなたはどのような立場で今回の研修会に参加しましたか（複数回答可）

- 新任教員として：13名
- 学内のFD担当委員として：4名
- 新任教員ではないが研修会に関心を持って：13名
- 事務職員として：1名
- その他：2名（教務委員として、教務委員会からの依頼）

質問2.あなたは今回の研修会のことをどのようにして知りましたか（複数回答可）

- 学内のビラ・ポスターから：3名
- 関西FDのHPから：1名
- FD業務を担当する教職員から：19名
- その他の教職員から：1名
- 関西FDからのEメールによる案内で：7名
- その他：2名（職場の研究者から、関西FDからのEメールの転送メールから）

質問3.あなたは今回の研修会に参加したきっかけは何ですか（複数回答可）

- 大学から参加するよう指示があったから：3名
- FD担当委員の業務として参加する必要があるから：2名
- 自分の教育能力を高めたかったから：24名
- 大学教育を考える機会が欲しかったから：11名

- 実際に教育を行う上で悩んだり困ったりしたことがあるから：12名
- 研修会の内容そのものに興味をもったから：15名
- 他大学の研修会に参加してみたかったから：5名
- その他：1名（教務委員として誰か一人参加することになっているので。）

質問 4. 今回の研修会で参考になった点をお書きください（自由記述）

【授業スキルについて】

回答例

- ワークショップの具体的な例ももちろんですが、講師のコミュニケーション教育に対するお考えや、「コンテクスト」という概念が、教育だけでなく研究にとっても参考になりました。
- 発問の重要性について学ぶことができた。ルーブリックや授業のちょっとした工夫等、すぐにでも取り入れたいと思う。

質問 5. 今回の研修会で改善したほうがよい点をお書きください（自由記述）

【開催場所について】

回答例

- 学外から参加した者にとっては、会場の場所がわかりにくかったです。チラシにあった建物の名前が学内の案内図に載っていませんでした。
- 場所が不便に感じました。今回は休日でしたので遠くてもいいのですが、バスや電車の本数が多いところにしてほしいと思いました。

【開催期間について】

- 講師の先生もおっしゃったように、もともと3日間のプログラムを2日間にするには無理があるように思います。（ただ矛盾していますが、3日間になると参加しにくくなるようにも思います・・・）

【参加条件について】

回答例

- 私の先輩も参加したかったみたいですが、新任向けとなっていましたので今回は辞退しておられました。教育経験のある方もいらっしゃいましたので、そのような方でも参加できるのであれば、周知のポスターに誤解のないように明記した方がよいと思いました。
- 参加の縛りが、「教歴10年未満」であれば、30名集まったかもしれません。「スキルアップしたい方によりオープンに」という意味です。

質問 6. 今回の研修会全体の感想についてお書きください（自由記述）

回答例

- 開催テーマが明確ですので、受講者は参加しやすいのではないかと考えます。受講する側は「そのテーマに関する情報を収集」することを目的にしていると考えますので、講師の方と講義中でも直接話が聞ける点は非常に有益な環境だと感じました。

質問 7. 今回のような他大学の研修会を受講できる制度について、ご意見・ご感想があればお書きください（自由記述）

【有意義な制度である】

回答例

- 私は、今年度から首都圏の私大から関西圏の国立大に転任してきましたのですが、私大と国立大では事情やFDに関する考え方等、多くのことが異なり、毎日勉強になります。今回、また別の大学での研修会に参加し、さらに視野が広がったように感じます。もしかすると、新任や転任の先生よりもむしろ、同じ大学でずっと教えている先生の方が、他大学での研修会に意義があるかもしれないと考えました。

【他大学の教員と交流することのメリット】

回答例

- 自分の大学だけでなく、他大学の先生と一緒に受講できるのは、視野が広がり交流のきっかけとなるため良い制度であると思います。
- 非常に有難い制度だと考えます。交通費の支給等、参加しやすい環境を整備していただいているので、積極的に参加することができます。学内だけでは慣れ合いになってしまうところを、他大学の熱心な取り組みを知る機会にもなり、大変勉強になりました。
- 他大学を訪れることも新鮮な気持ちになると思います。また、開講日時や場所などで都合が合えば、参加してみたいと思いました。
- 他大学の教育環境も見せていただいたり、他大学の先生方と知り合える機会にもなり出向くこと自体は日程調整など大変な面もありますが、いい制度だと思います。

【独力で研修会を実施することが困難な大学に対する支援として有効】

回答例

- 私が所属している短大のように、単独で研修会を開催することの難しい大学の教員にとっては、非常にありがたい制度だと思います。

質問 8. この質問はFD担当委員として参加された方のみにお聞きします。自校の研修会を企画する上で、今回の研修会に参加して参考になった点・参考にはならなかった点をそれぞれお書きください（自由記述）

- 今回の研修会は委員としてとても参考になった。本校は開学したばかりで、私を含め、助手は教育現場が初めての者がほとんどである。「自分たちの頃と今の学生は違う」という感覚があるが、どう関わるか悩むことが多い。そこへの関わり方を学べたので、本学のFD委員会では報告し、研修等を企画していきたい。

4. 2013年度にむけて

2011年度に引き続き、今年度も概ね好意的な評価を得ることができた。制度の評価は定まってきたといえるだろう。現在の課題としては、開催回数や内容が妥当であるのかどうかを検証することである。来年度は会員校のニーズを、アンケートにより把握したいと考えている。また、研修を公開してくれる大学をどのように確保していくかは引き続き課題である。参加者からの評価が高いとはいえ、制度自体の知名度はまだ十分ではないと思われることから、引き続き広報の在り方についても検討していく必要があるだろう。

(田口 真奈)

III-4. FD 連携企画ワーキンググループ

1. 組織体制と活動内容

1-1. 組織体制

FD 連携企画部と FD 連携企画ワーキンググループ (WG) は、2012 年 12 月現在、以下の大学で構成されている (敬称略)。

◆FD 連携企画部

- ・立命館大学 (安岡高志)・・・責任校
- ・関西大学 (田中俊也)
- ・神戸常盤大学 (松田光信) * 関西 FD パイロット校
- ・京都大学 (松下佳代、田川千尋、坂本尚志)・・・事務局

◆FD 連携企画 WG

上記の FD 連携企画部、および以下の 3 校を含む計 7 校

- ・藍野大学医療保健学部理学療法学科 (平山朋子) * 関西 FD パイロット校
- ・大阪府立大学 (新井隆景) * 関西 FD パイロット校
- ・京都精華大学 (高橋伸一)

1-2. 活動内容

(a) 目的と特色

FD 連携企画 WG の目的は、関西地区 FD 連絡協議会の会員校のうち、共通のテーマ (問題別、アプローチ別、組織別、ディシプリン別など) を抱える大学がグループを作り、協働で問題への対処に取り組むことである。そのため、一回限りのイベントを実施するのではなく、継続的に情報交換しながら、実質的な教育改善・FD を進めるための緩やかなコミュニティを形成することをめざしている。

FD 連携企画 WG には、ニーズの高いテーマに関連して自校の FD に取り組む会員校を「関西 FD パイロット校」として支援するという特色がある。2012 年 12 月現在、神戸常盤大学、藍野大学、大阪府立大学の 3 校が関西 FD パイロット校となっている。

(b) 活動計画

FD 連携企画 WG では、以下のようなプロセスで活動を展開している。

- ①特定のテーマについてシンポジウムを開催する。
- ②シンポジウム参加校・参加者を中心にグループを形成する。
- ③先進校の取組事例の学習や自校での試行を WG が支援する。
- ④関西 FD のホームページ・ニュースレターや大学教育研究フォーラム等で活動報告を行う。
- ⑤毎年、①～④を繰り返しながら、連携を拡大・進化させる。

2. 2012 年度の活動報告

2-1. 活動成果の出版

本 WG では、2008 年度より 2011 年度まで毎年 1 回計 4 回にわたり、「思考し表現する学生を育てる」というテーマでシンポジウムやワークショップを開催してきた。関西 FD には多様な大学が参加しており、また、一つの大学にあっても多様な学部等が含まれている。したがって、FD の具体的な課題はそれぞれで異なってくることも少なくない。そこで、大学や専門分野の違いをこえて連携できるテーマとして選ばれたのが、このテーマであった。

2012 年度は、その中で紹介された実践例およびそこから得られた知見をまとめて、関西地区 FD 連絡協議会・高等教育研究開発推進センター編『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』という単行本をミネルヴァ書房より刊行することとした。現在、印刷中であり、年度内には刊行の予定である。

4 回のシンポジウムやワークショップの中で講師から紹介された取り組みは、教員個人の取り組みから学部や大学全体での組織的取り組みまで、また、初年次教育から卒論指導まで、文系・理系の枠をこえてさまざまな学問分野にわたっていた。さらに、参加者がグループワークに持ち寄った実践例もきわめて多様であった。こうして豊かな実践例とそれをもとに行われた豊かな議論がそのまま単行本の出版へとつながった。

編集の実務は、本 WG の事務局メンバー（松下、田川、坂本）で行った。

2-2. 本の構成

この本では、そうした取り組みや事例の中から、とりわけ多くの大学・学部・教員にとって指導の参考になるとと思われるものを選び出し、いくつかのテーマごとにまとめて紹介している。以下がその目次である。

イントロダクション —ライティングを指導するということ—

……松下佳代・田川千尋・坂本尚志（京都大学）

I ライティング指導のフレームワーク

第 1 章 思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築

—Writing Across the Curriculum を目指して— ……井下千以子（桜美林大学）

II レポート・論文の作成指導

第 2 章 「十字モデル」で協同的に論文を組み立てる ……牧野由香里（関西大学）

コラム 1 「十字モデル」を使った試み—卒業論文（卒業設計）演習科目のプレゼミとして—
……齊尾恭子・橋寺知子（関西大学）

第 3 章 「モジュール」に基づいたレポート作成技法 ……小田中章浩（大阪市立大学）

III 初年次教育

第 4 章 初年次アカデミック・リテラシー科目「日本語の技法」……薄井道正（立命館大学）

第 5 章 自己省察としての文章表現

—「日本語リテラシー」の教育実践を事例として— ……谷美奈（京都精華大学）

IV 学士課程を通じたライティング指導

第 6 章 専門教育・卒業論文につなげる初年次教育

—ピア・サポートの取り組み— ……土井健司・小田秀邦（関西学院大学）

第 7 章 読書感想文から臨床実習報告書までのライティング指導

……高橋泰子（大阪河崎リハビリテーション大学）

V 卒論・ゼミ指導

- 第8章 自分のテーマを2年間かけて卒論に仕上げる
—学びのコミュニティづくりとグループ学習の技法— ……北野 収（獨協大学）

VI 理系の文章指導

- 第9章 論文作成のための科学的和文作文法指導 ……倉茂好匡（滋賀県立大学）
コラム2 大講義で書くことを通じて学ばせる ……矢野浩二郎（大阪工業大学）
第10章 工学系のためのライティング指導—導入教育から実験レポートまで—
……池田勝彦（関西大学）

VII コピペ問題とコピペ対策

- 第11章 コピペ問題の本質 ……杉光一成（金沢工業大学）
第12章 コピペ対策の実践 —コピペ検索システム— ……花川典子（阪南大学）
おわりに ……安岡高志（立命館大学）

資料編

- 資料1 「論文の書き方」本から見るライティング指導の位置 ……坂本尚志（京都大学）
資料2 関西地区FD連絡協議会・FD連携企画WG
シンポジウム・ワークショップ（2008年度～2011年度）の概要……田川千尋（京都大学）

I「ライティング指導のフレームワーク」では、井下千以子氏（桜美林大学）に「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築を目指して」を寄稿していただいた。ここでとくに注目していただきたいのは、学士課程カリキュラム全般にわたってライティング指導を支援する Writing Across the Curriculum という考え方である。初年次教育でのレポートの書き方から4年生の卒業論文までの多様なライティング指導が、知識変換型—知識叙述型、一般教育—専門教育という2軸からなる4つの象限で性格づけられ、どう発展させていけばよいかが示されている。

II「レポート・論文の作成指導」は、牧野由香里氏（関西大学）の第2章『『十字モデル』で協同的に論文を組み立てる』と小田中章浩氏（大阪市立大学）の第3章「モジュールに基づいた小論文作成技法」という2つの章と、齊尾恭子氏・橋寺知子氏（関西大学）のコラム1『『十字モデル』を使った試み』からなる。牧野氏の十字モデルは、思考と表現に必要な7つの構成要素（背景・命題・提言、反論・論駁、抽象・具体）を十字の形に配したモデルで、レポート・論文だけでなく、スピーチ・プレゼンなどのオーラル・コミュニケーション、物語や創作などの創作活動にも使えるという幅広い応用可能性をもつ。まさに Writing Across the Curriculum に役立つモデルである。第2章では、牧野氏自身の卒論指導の実践が紹介されているが、コラム1では、さらに、同じ大学の他分野、他学年での十字モデルを使った実践例を紹介していただいた。アカデミック・ライティングに関する初年次導入科目から専門科目・卒論指導にいたるまで、汎用性のあるワークとなりうる可能性が示唆されている。

小田中氏による「モジュール」もまた、理系でも文系でも、初年次教育でも卒論指導でも、また作成者自身だけでなく他の教員でも使える、応用可能性の高いアカデミック・ライティング技法である。モジュールとは、「全体の中である程度独立して修正したり、新しいものを入れ替えたりすることが可能な部分」のことである。アカデミック・ライティングではよく「パラグラフ・ライティング」の重要性がいわれるが、パラグラフよりモジュールを重要な単位として取り出した点が、この技法のポイントである。

III「初年次教育」では、現在、ライティング指導が最も熱心に行われている初年次教育での2つの組織的取り組みが紹介されている。薄井道正氏（立命館大学）による第4章は、立命館大学で2012年度から始まった「初年次アカデミック・リテラシー科目『日本語の技法』」について書かれたものである。ここでは全学の初年次生に対し6名の教員によって、共通のシラバス・教材・指導案・評価基準で半期の授業が行われている。「論証構造図」や「論文のフォーマット」は十字モデルやモジュールの考え方と類似している点も多い。すべての初年次生が「論文が書けること」を目標にして展開されている授業は、まさにライティング指導のヒントにあふれている。谷美奈氏（京都精華大学）の第5章「自己省察としての文章表現」は、京都精華大学「日本語リテラシー」の教育実践にもとづいている。この章は、自己省察（内面の掘り下げ、捉え返し）をエッセーの形式で表現させるという実践の報告である点で、アカデミック・ライティング主体の本書の中で異彩を放っている。こちらも組織的取り組みであるが、課題テーマ設定は担当教員に委ねられており、個々の教員の裁量幅が大きい。書くことを通してのA君の成長については、ぜひウェブサイトに掲載した彼の作品もあわせて読んでいただきたい。

IV「学士課程を通じたライティング指導」は、文字どおり *Writing Across the Curriculum* に関する2つの章からなる。土井健司氏・小田秀邦氏（関西学院大学）による第6章「専門教育・卒業論文につながる初年次教育」では、第1・第2学年での「基礎演習」、第3学年の「分野別演習」、第4学年の「特殊研究演習」と卒業論文と、書くことを中心にすえながら指導の連続性を確保することをめざす神学部での取り組みが紹介されている。ラーニング・アシスタントの目に映った初年次生の問題点（「実例の参照」や「徹底的な模倣」の欠如、「やりたいテーマが見つからない」など）は、他大学の学生にも共通しているのではないだろうか。高橋泰子氏（大阪河崎リハビリテーション大学）の第7章「読書感想文から臨床実習報告書までのライティング指導」は、近年、急速に拡大し学生も多様化している医療系大学での、入学前教育から臨床実習までをカバーするきめ細やかなライティング指導の報告である。読者感想文から症例報告書までこれほど多様な種類のライティング指導が行われていること、医療専門職においてもライティング指導が指導の柱の一つをなしていることに驚きを覚える読者は少なくないだろう。

V「卒論・ゼミ指導」に収められているのは、北野収氏（獨協大学）の第8章「自分のテーマを2年間かけて卒論に仕上げる」の一章のみだが、他の部に負けない重みがある。現在、学生の就職活動は長期化し、3年後期から4年前期にかけては、大学教育が正常に機能していない状況にある。そこで北野氏は、就活期間のブランクを組み込んだ上で、学生を2年間かけた卒業論文の執筆に取り組みさせている。ここでいう卒論執筆とは、「検証可能なオリジナルの『問い』を設定し、妥当な方法により必要な情報を収集し、分析・考察し、何らかの『発見』を見出す一連の営み」のことであり、学生からすれば相当に高いレベルの学問的営為である（実際、学生たちはすぐれた卒論を書き上げ、数本は学会誌にも掲載されている）。2学年あわせて30人のゼミ生からなる学びのコミュニティづくりから、論文作法を学ぶためのさまざまなワークショップまで、その指導は多くの示唆に富んでいる。

VI「理系の文章指導」は、倉茂好匡氏（滋賀県立大学）の第9章「論文作成のための科学的和文作文指導法」と池田勝彦氏（関西大学）の第10章「工学系のためのライティング指導」、および、矢野浩二郎氏（大阪工業大学）のコラム2「大講義で書くことを通じて学ばせる」で構成されている。倉茂氏の指導は、論文執筆が目前に迫った環境生態学科の4年生・大学院生を対象に2日間の集中演習形式で行われるものである。倉茂氏はまず、科学的作文で学生が起こしがちなエラーを、章の内容構成におけるエラー、段落間の論理関係におけるエラー、段落内の論理関係におけるエラー、一文内の修飾関係におけるエラーの4タイプに分類する。そし

て、集中演習での指導の進め方を、学生との会話もまじえながら活写している。修正前と修正後の学生の文章の変化を見ると、この指導がどのくらい効果的であるかがうかがえる。矢野氏の実践は、前任校のケンブリッジ大学で成果を上げていた少人数対象のエッセイライティングによる生物学教育を、現任校の大講義用にアレンジしたものである。他章のようなレポート・論文の作成のためのライティングではなく、書くことを通して内容の理解を深めるためのライティングである点がユニークである。第10章は関西大学化学生命工学部先端マテリアル工学科における組織的取り組みの報告である。1年生対象のフレッシュマン・ゼミナールでの「読むことと書くこと」、および、2年生対象の実験レポートでの指導のしかたが、具体的な教材（チェックリストなど）を例示しながら書かれている。工学部の教員団の協働によって、井下氏という「学習技術型」から「専門基礎型」へとライティング指導が展開している様子が読みとれよう。

最後のVIIは、がらっと変わって、多くの大学教員が頭を悩ませている「コピー問題とコピー対策」に関する2つの章からなる。杉光一成氏（金沢工業大学）による第11章「コピー問題の本質」と花川典子氏（阪南大学）による第12章「コピー対策の実践」である。杉光氏は、コピー検出ソフト「コピーペルナー」の開発者として知られる。アメリカでは、コンピュータのコピー&ペースト機能を用いた剽窃行為は厳しい処罰の対象となるのに対し、日本の大学では甘く見過ごされていることが多い。しかし、杉光氏の意図は、処罰の対象を発見することよりもむしろ、抑止にあることに注意を向けていただきたい。第12章は、花川氏と院生たちが共同で開発し、阪南大学において全学的に導入されているコピー検出システムについての報告である。技術的には、学内の既存施設を使って、一晩という短時間で、全レポート（最大1000件）のコピー検出ができる点が魅力なのだろう。しかし、このシステムの目的も、コピー検出そのものではなく、教育の質の向上に置かれている。実際、このシステムの導入によってコピーペが減少するとともに、学生をコピーペに陥らせにくいレポート課題が明らかになるなどの効果が得られている。

2-3. 特徴

資料1に示されているように、「論文の書き方」本はこれまで数多く出版されているが、大学教員のための「ライティング指導」本は、初年次教育関係の本以外はあまりなく、本書のように学士課程教育全体をカバーし、多様な学問分野にまたがる本は存在していない。

また、本書では、掲載されている図表（シラバスやワークシートなど）を関西FDのウェブサイト上にアップし、利用者が自分の大学・学部・授業用にカスタマイズできるようにする予定である。

このような工夫によって、すぐれた実践を創造し、共有し、再利用するというサイクルを、ライティング指導において作り出したいと考えている。

（松下 佳代、坂本 尚志、田川 千尋）

III-5. 広報ワーキンググループ

1. はじめに

広報ワーキンググループ（WG）は、協議会に関する広報業務を担当している。広報部は以下のメンバーで構成されており、2013年1月現在、広報部と広報WGのメンバーは一致している。2012年度に京都大学のメンバーに交替があった。

広報部・広報WG（敬称略）

大久保敦（大阪市立大学：責任校）

伊東千尋（和歌山大学）

酒井博之、坂本尚志（4月～）（京都大学：連絡担当）

2. 活動報告

2012年度の広報WGにおける活動報告を以下におこなう。今年度の具体的な活動として、ニューズレター8号・9号の発行、ホームページおよびメーリングリストの維持・管理、「FD活動報告会」に関する広報関連業務をおこなった。

2-1. ニュースレターの発行

本年度のニュースレターは、第8号（7月、編集責任者：伊東千尋）と第9号（12月、編集責任者：伊東千尋）の2号を発行した（図1）。900部印刷し全会員校宛に送付した。非会員校に対しても入会を促すため各号1部を送付した。また、ニュースレターのPDF版を本協議会ウェブサイトへ掲載し一般公開した。

本ニュースレターでは、協議会が企画・実施したイベント等の活動報告や、各WGからのお知らせのほか、会員校間のFD活動について情報共有を促進するため、個別の会員校におけるFDの取り組み紹介を充実させてきた。第8号（タイトル：『見える化』ということ）では、第5回総会、研究WGによる「FDに関する実態調査（2012）」結果報告に加え、京都外国語大学、帝塚山大学、姫路獨協大学、大阪大学、大阪樟蔭女子大学より活動報告がなされた。また、総会と同日に開催された「FD活動報告会2012」に関する報告もなされた。第9号では、研究WGのFDメディアSG活動報告、「初任者教員向けプログラム（カンジュニ）」実施報告に加え、神戸常盤大学、東洋食品工業短期大学からの活動報告がなされた。

2-2. ウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理

本協議会のウェブサイト（<http://www.kansai-fd.org>）の維持・管理を随時おこなった（図2）。本年度は、本協議会の会員校に所属する個々の教職員を対象としたメーリングリスト（「会員校教職員メーリングリスト」）を作成し、ウェブサイト上に設置した。本協議会では、これまで、会員校への事務連絡やイベントの案内等にメーリングリストを利用してきたが、会員校の連絡先のアドレスのみが登録されており、FDイベント等の案内が会員校の教職員に広く告知されないという課題があ

った。今回新たに作成したメンバーリスト (ml_members@kansai-fd.org) は、会員校の教職員であれば、本協議会ウェブサイトから登録することができる。

表1に示すように、本サイトは月平均2,232件(2012年4月～11月。ユニークアクセス数では432件/月)のアクセスがあった。このほか、幹事校や各ワーキンググループおよび研究サブグループにおける連絡用、全会員校向けの案内用のメンバーリストを適宜作成、更新、管理した。



図1 関西地区FD連絡協議会ニュースレター 第8号



図2 関西地区FD連絡協議会 ウェブサイト

表1 ウェブサイトのアクセス数（4～11月）

月	トータルアクセス数	ユニークアクセス数
4	3,153	495
5	2,870	551
6	3,376	591
7	2,265	465
8	1,485	345
9	1,623	339
10	1,405	320
11	1,681	352
平均	2,232	432

2-3. 「FD活動報告会」関連業務

2012年5月の総会で開催した「FD活動報告会2012」（III-2参照）に関する広報業務をおこなった。「FD活動報告会2012」報告書として、発表校のポスター原稿と会員校間ピアレビューを冊子化し、ニュースレター8号とともに会員校に5部ずつ配布した。なお、本報告書は、ピアレビューにおける会員校教職員間のコメントのやり取りを含むため、慎重を期して会員校の教職員のみ閲覧可能としている。また、FD共同実施WGの「初任教員向けプログラム（カンジュニ）」の発表を含む、17校21件の発表原稿一覧を、本協議会ウェブサイト上で一般公開した。

2-4. MOST講習会の共催について

2012年度総会において予定されている「FD活動報告会2013」におけるポスターセッションの発表原稿の作成と会員校間での蓄積、共有をおこなうため、京都大学で構築したオンラインFD支援システム「MOST」（<https://most-keep.jp>）内で原稿を作成することが推奨されている。MOST利用のための講習会開催を2013年3月に予定しており、これを過年度同様、本WGと共催で実施する（本稿作成時点で未実施）。

3. 次年度の計画について

最後に、広報WG次年度の活動計画について述べる。まず、本協議会のウェブサイトおよびメーリングリストの維持・管理、ニュースレターの発行を引き続きおこなう。ニュースレターについては、引き続き、本協議会による活動報告のほか、会員校で実施されているFDの取り組み紹介による情報共有の充実を図る。さらに、本協議会で「FD活動報告会2013」を次年度総会において開催するが、会員校間のピアレビュー活動をオンラインおよび冊子媒体で蓄積・共有するための支援をおこなう。冊子は会員校に限定して配布予定である。翌年度の報告会のための講習会も共催する予定である。

（酒井 博之）

III-6. 研究ワーキンググループ

研究ワーキンググループ（WG）は、2011年度、関西地区FD連絡協議会第4回総会（5月21日）において承認された今年度の活動方針に基づいて、主として二つの研究サブグループ（SG）を中心に活動を行った。その二つの研究SGは、「FDメディア研究SG」（主査校：大阪成蹊大学）、「FDデザイン研究SG」（主査校：神戸大学）である。「授業型学生支援研究SG」は、年度途中で主査の異動があり、やむなく休会となった。また、「授業評価研究SG」（主査校：神戸大学）も、本年度は研究会合をもっておらず、来年度からは「FDデザイン研究SG」の一つの課題として取り組む形で進めていくことを検討中である。なお、研究WG、各研究SGの活動等については、関西地区FD連絡協議会の各WGの活動に関するホームページ（<http://www.kansai-fd.org/wg/>）に掲載されている。

以下では、本年度の各SGの活動内容の概要を報告する。

1. FDメディア研究SG

FDメディア研究SGは、出欠確認研究SGから名称を改めて3年目を迎えた。2012年度も、4回の研究会（第3回は12月14日、第4回は2月22日の予定）を開催する。ここでは第1回目と2回目の研究会、Saai-MASの下でのモバイル端末を利用した授業評価アンケート、出欠確認見学会などの概要を紹介する。

1-1. 第1回会合（通算17回会合）

(a) 開催概要

- ・日 時：2012年6月15日（金） 16時30分～18時30分
- ・場 所：大阪成蹊大学 相川キャンパス 中央館5階537教室
- ・参加校・企業：大学・短大15校、専門学校1校、高校1校、企業1社、合計21名

(b) 議 事

1. 奈良文化女子短期大学のFD～AP, CP, DP策定の経緯と今後～

発表者：奈良文化女子短期大学 横尾祐郁氏

今回のご発表は、「メディア」というよりはディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）に関する内容が中心であった。奈良文化女子短期大学でこれらをどのように策定したか、その経緯をお話しいただいた。会合では以下の報告があった。

1.1 大学紹介

1.2 3つのポリシーの背景 中央教育審議会の答申より

1.3 求められる3つのポリシー 認証評価の観点から

1.4 本学ディプロマポリシー(DP)策定の経緯

1.5 本学カリキュラムポリシー(CP)策定、アドミッションポリシー(AP)改訂経緯

1.6 今後の課題

1.7 後質疑応答

発表後、熊本学園大学、大阪商業大学、京都大学から質問・提案等があった

2. 総括

京都大学高等教育研究開発推進センター長大塚雄作先生より総括を頂いた。

3. 新規会員等の自己紹介

新メンバーおよび会合に初めて参加した会員の自己紹介があった。

1-2. 第2回会合（通算18回会合）

(a) 開催概要

- ・ 日 時：2012年9月7日（金）16:30～18:30
- ・ 場 所：大阪成蹊大学 相川キャンパス 中央館1階特別会議室
- ・ 参加校・企業：大学・短大11校、専門学校1校、高校1校、企業1社、合計17名

(b) 議事

1. 京都光華女子大学の教育／学習支援システム
発表者：京都光華女子大学 阿部一晴
2. 大阪産業大学における授業アンケートの現状と課題
発表者：大阪産業大学 大野麻子
3. 京都文教大学での Saai-MAS の運用効果と課題
発表者：京都文教大学 垣鏑祐介

意見交換

3つの発表後パネルディスカッション形式で意見交換を行い、会場からの質問に、発表者3名から回答を頂いた。発表者が行っているポートフォリオに関する質問や授業アンケートの公開等に関する質問が積極的に出され、約40分間ディスカッションを行った。

1-3. 「携帯電話での授業評価アンケート、出欠確認」見学会

前期2回、後期2回の「携帯電話での授業アンケート、出欠確認」見学会を行った。

1. 前期6月11日（月）12時50分～14時30分
場所：大阪成蹊大学相川キャンパス301教室および福永研究室
参加：6校、8名
予定では1時間であった見学会を1時間延長して、福永研究室でさらに詳細な説明をした。
2. 前期6月15日（金）15時30分～16時30分
場所：大阪成蹊大学相川キャンパス537教室
参加：10校、1企業、15名
3. 後期11月14日（水）12時50分～14時40分
場所：大阪成蹊大学相川キャンパス549教室および福永研究室
参加：2校、1企業、4名
予定では1時間であった見学会を50分延長して、福永研究室でさらに詳細な説明をした。
4. 後期11月20日（火）11時50分～12時50分
場所：大阪成蹊大学相川キャンパス525教室

参加：1 大学、1 高校、3 名

4 日間で延べ 20 校、2 企業、合計 30 名の参加があった。見学会は 3 年間続けているがいまだ多くの学校からの参加があり、これら学校に対する見学会の貢献度は大きいと思われる。今後も見学会を継続的に続けていきたいと思う。

2. FD デザイン研究 SG

本年度は、年度末に、ワークショップ等を開催する可能性があるが、現時点では特に活動を行っておらず、ここでは、昨年度末に、高等教育研究開発推進センターが企画し、FD デザイン研究 SG の協力を得て実施した FD 実態調査について、関西 FD 総会において報告した概要を報告する。

FD が 2008 年度にすべての高等教育機関において義務化されてから 4 年が経過した。関西地域では、この FD の義務化を機に、「関西地区 FD 連絡協議会」を設立し、各大学で蓄積される FD に関する活動・実践・経験を共有すると共に、人的資源や FD 活動の場の提供などを通じて、大学教育の実質的な改善に向けて、相互研修型で互恵的な大学間 FD ネットワークの構築を行ってきた。しかしながら、中央教育審議会では、「FD 活動は、義務化以降、形骸化している可能性がある」との指摘もあり（大学分科会大学教育部会 H23・9・26 配布資料『「学士過程答申」の主な提言とその進捗の概要』）、「実質的」な FD 活動や大学教育改善に向けては、改めて FD 活動に関わる現状を把握し直す必要があり、それと同時に今後に向けての課題を浮き彫りにしていく時期に来たと思われる。

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、関西地区 FD 連絡協議会の設立に向けて、FD 義務化前年の 2007 年 6～7 月に、関西地区の大学・短大等を対象として、FD に関する実態およびニーズ調査を行っている。そして、今回 2012 年 2～3 月に、同じく関西地区の大学・短大等を対象として、FD デザイン研究 SG の協力を得て、FD に関する実態調査を実施し、5 月 7 日時点で回収した 348 件の回答を基に予備的な分析を行い、5 月 19 日に開催された第 5 回総会において、報告を行った。

今回 2012 年に実施した「FD に関する実態調査」は、(a) FD の義務化以降、各大学において FD 活動はどのように展開され、これまでにどのような成果が得られてきているのか、各大学のこれまでの FD 関連活動の実施状況や課題に関して情報の共有を行うこと、(b) 各大学のこれまでの FD 関連活動の状況や課題に関して情報を共有・公開し、各大学での実質的な FD 活動等の推進に資すること、そして、(c) 関西地区 FD 連絡協議会あるいは大学間ネットワーク全般に対する要望なども収集して、今後の当協議会の活性化と実質的な大学間ネットワークを形成する基礎的な資料を作成することの 3 点を主たる目的として実施した。

調査票は、(I) 基本情報（回答者の属性、所属大学の属性、所属 FD 組織の属性）、(II) 教育の現状と課題（教育の課題・目標、教育上の問題点、教育充実のために実施してきたこと、今後実施したいこと）、(III) FD に関する意識と成果（FD 活動の活発度・改善度、教育の変化・改善事項、FD 推進に寄与してきた事項・最も寄与する方策）、(IV) FD のニーズ（FD 活動に必要な支援、現在の日本の大学教育改革のための必要事項）、(V) 自由記述（FD 全般に関する自由記述、関西地区 FD 連絡協議会に関する自由記述（要望を含む））という 5 つのパートから構成された。

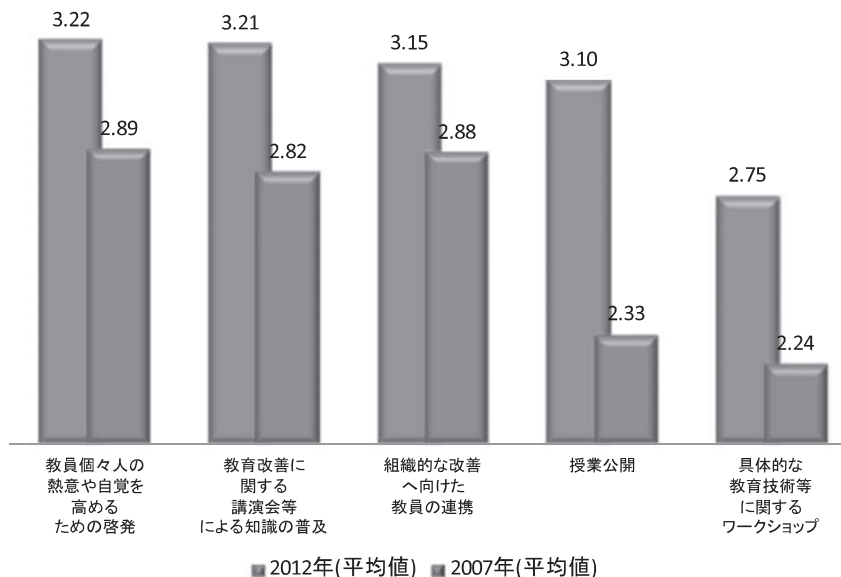
また、今回の調査票は、回収率の向上のため、郵送調査・オンライン調査・電子メールでの

返信という3つの方法で実施された。回答者は、教員・職員に関わらず、全学もしくは部局のFDに関わる組織や担当部署の方で、教員277名、職員68名、身分不明3名の合計348件の有効回答を得た。このうち関西地区FD連絡協議会会員大学からの回答は、全体の83.2%であった。

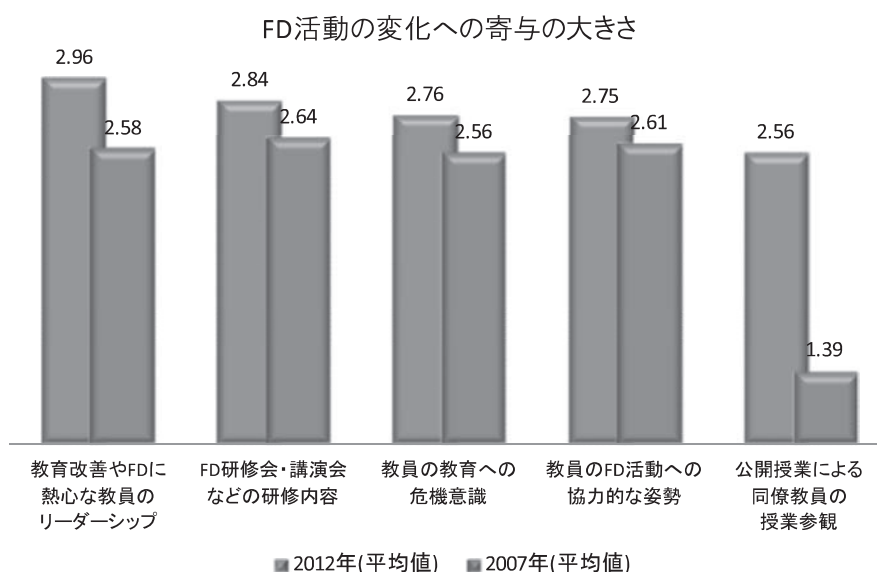
まず、パート(II)より、教育の現状・課題・目標について、学生に関わる問題、教員側の問題、そしてリソースに関わる問題などについて13項目について1~4点の4件法で評定してもらった。教員・職員ごとにこれらの得点の平均値の比較を行ったところ、すべての項目において統計的有意差は見られなかった。このことは、教育の課題や目標について感じるところは教職員で十分に共有されており、FDと並んでStaff Development (SD)の重要性も示唆する結果と言えよう。

次に、同じくパート(II)では、これまでにFDとして実施してきたことについて21項目に1~4点の4件法で回答してもらった。先に紹介しました2007年時点における同様の調査と得点を比較した結果、この5年間で、知識の普及や教員間の連携、教育技術等に関する活動が有意に増加し、中でも授業公開が最大の伸びを示していることが分かる。授業を公開する試みは、他の教員の教育技術を参考にすることができるため、自然発生的な交流・情報交換の場として機能し、また教員側への負担も少ないというあたりがその理由として考えられる。パート(III)において、今後も継続して実施していきたいFD活動について尋ねたが、継続的な取り組みは全体的に軒並み低下傾向にある中で、授業公開は5年前と変わらない水準が保たれていたため、授業公開は、今後も、有効なFD実践活動のひとつとなるものと考えられる。

FDとして実施してきたこと



次に、パート(III)より、これまでのFD活動の推進に寄与してきた活動はどういったものであるのかについて20項目に1~4点の4件法で回答してもらったところ、左段下のグラフの通り、研修の内容、教員の意識の持ち方や協力的な姿勢、授業公開などが変化や推進に寄与してきたということが分かる。



パート (IV) では、今後大学で実施する FD 活動についてどういったものについて支援を必要としているかという点について 27 項目に 1～4 点の 4 件法で尋ねた。この結果も、先と同様に 2007 年時点のニーズ調査の結果と比較したところ、全体的な傾向として、FD 活動の支援の必要性は低減傾向にあることが分かった。しかし、これは F 活動が下火になってきたことを示すわけではなく、FD 義務化以降の 5 年間を経て、各大学において、FD 活動への取り組みは決して特殊なものではなく、日常的な取り組みとして認識され始めてきた結果ではないかと考えられる。

パート (V) の自由記述欄では、今後の FD 活動一般、そして関西地区 FD 連絡協議会の活動方針を考えるために非常に有用なコメントが得られた。今回、目に留まったコメントを以下に 2 つ示しておく。

『義務の FD から日常の FD へ。授業や学生との関わりが楽しくなれば、教員も学生も大学生活が充実してくる。FD はそのための活動であるという動きを作っていきたい。』

『FD 組織だけが FD 活動を行っているわけではなく、さまざまな教育組織や委員会の中に、FD の視点・観点を持たせることが、この活動の推進に寄与するし、具体的な取り組みにつながりやすい。』

上記の自由記述はいずれも、FD 活動は、学生の大学生活だけではなく、教員側の意識や生活をポジティブな方向に変え得るためのものであるという認識を共有することの重要性を再認識させてくれる。今回は、先の総会で行った速報版の報告を書き起こすに留めているが、今後は、より有効な示唆を得ることを目的として、調査データをさらに精緻に分析を行い、報告をしていきたい。最後に、関西地区 FD 連絡協議会第 5 回総会において報告を行った際の資料は、ウェブ上から PDF 版をダウンロードすることができる。

(<http://www.kansai-fd.org/activities/meeting/20120519.html>)

(飯吉 透、大塚 雄作、高橋 雄介)

III-7. 主催・共催・協賛イベント一覧

年月日	イベント概要
2012.5.6 【共催】	滋賀県立大学主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 2012 年度「授業の基本」ワークショップ 「授業の基本と授業づくり」 授業の基本①－基本の基本－ 授業の基本②－授業展開上の罫－ 授業づくりワークショップ 講師：滋賀県立大学教育実践支援室長 倉茂好匡 於：滋賀県立大学
5.25 【共催】	滋賀県立大学主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 「授業の方法－入門編 2：数式を扱う授業のために－」 講師：滋賀県立大学教育実践支援室長 倉茂好匡 於：滋賀県立大学 A 2 棟 201 教室
6.22 【共催】	滋賀県立大学主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 「授業の方法－入門編 3：視聴覚教材を用いる授業のために－」 講師：滋賀県立大学教育実践支援室長 倉茂好匡 於：滋賀県立大学 A 2 棟 201 教室
6.23 【協賛】	関西大学教育開発支援センター主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 第 7 回 FD フォーラム「大学教育の質的向上を目指して－TA・SA 制度の有効活用－」 講師：日本大学文理学部教育学科教授 北野秋男 於：関西大学千里山キャンパス第 2 学舎 2 号館 3 階 C303 教室
7.27 【共催】	滋賀県立大学主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 「授業の方法－入門編 4：授業に学生を「参加」させるためには－」 講師：滋賀県立大学教育実践支援室長 倉茂好匡 於：滋賀県立大学 A 2 棟 201 教室
8.19 【協賛】	京都大学高等教育研究開発推進センター／大学総合教育研究センター／財団法人電通育英会主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 大学生研究フォーラム 2012 学校から仕事へのトランジション調査の中間報告 報告 1：「学校教育の経験は仕事にどのように影響を及ぼしているか」 報告者：溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授） 報告 2：「『企業での活躍と大学時代の経験』の関係をさぐる」 報告者：中原 淳（東京大学大学総合教育研究センター） シンポジウム 「グローバルキャリアの時代に大学教育は何ができるか？」 ファシリテーター：中原 淳（東京大学大学総合教育研究センター）

	<p>事例報告 1:「生物学自主研究－『研究』を通して学部学生が能動的な社会的力をつける試み－」 福田 公子 (首都大学東京理工学研究科)</p> <p>事例報告 2:「学生の国際競争力を高めるための教育・学習」 勝又 美智雄 (国際教養大学)</p> <p>事例報告 3:「グローバル戦略に呼応した人材開発のあり方」 林 雅子 (アサヒビール株式会社人事部)</p> <p>参加者ダイアログ パネルディスカッション 小括 総括パネルディスカッション 児美川孝一郎 (法政大学キャリアデザイン学部) 吉見 俊哉 (東京大学大学総合教育研究センター) 大塚 雄作 (京京都大学高等教育研究開発推進センター センター長) 司会: 松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) 於: 京都大学百周年時計台記念館</p>
9. 10-11 【協賛】	<p>関西学院大学高等教育推進センター主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 「大学教員のための『講義方法のブラッシュアップ』」 9月10日 (月) 講義「基本の基本」 「授業展開で陥りやすい罠」 ワークショップ「教材研究」 9月11日 (火) 講義「発問法、アクティブラーニング法」 グループワーク「授業の完成」 授業発表会 於: 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス G 号館 326 教室</p>
9.26 【共催】	<p>大阪大学教育・情報室主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 「平成 24 年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修」 第一部 全体講演 「教育から学習へ: 主体的学びを重視した大学教育への転換を求めて」 川嶋 太津夫 神戸大学大学教育推進部 教授 「個人情報保護」 尾山 眞之助 大阪大学 理事 第二部 分科会 「新しい TA 制度」 「能動的学習」 「ICT を用いた模擬授業」 「授業支援システム WebCT」 「学生相談室から見た阪大生」</p>
10.10 【共催】	<p>京都大学高等教育研究開発推進センター主催 関西地区 FD 連絡協議会共催 第 84 回公開研究会 『ピア・インストラクションによるアクティブラーニングの深化』 第一部 講演/ワークショップ</p>

	<p>エリック・マズール (ハーバード大学) 「Peer Instruction: Promoting Deep Understanding (ピア・インストラクション：深い理解を促進する)」 第二部 パネルディスカッション 「京都大学の心理学の授業におけるピア・インストラクションの実践—大教室でのアクティブラーニング」 “The Psychology Class Using Peer Instruction at Kyoto University: An Active-Learning in the Large Classroom” 溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授) 「アクティブで深い学びのための仕組み」 “Pedagogy for Active and Deep Learning” 松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) 「教育イノベーションの育成と普及」 “Fostering and Diffusing Educational Innovation” 飯吉 透 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) <コメント> エリック・マズール <ディスカッション> 閉会挨拶 大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター センター長) 於：京都大学百周年時計台記念館・国際交流ホール</p>
<p>11.7 【協賛】</p>	<p>関西大学教育開発支援センター主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 第 8 回 FD フォーラム 『コミュニケーション再考—分かりやすい「伝え方」』 大島 武 (東京工芸大学芸術学部 教授) 於：関西大学千里山キャンパス第 2 学舎 2 号館 4 階 C401 教室</p>
<p>12.22 【協賛】</p>	<p>龍谷大学大学教育開発センター主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 第 8 回龍谷大学 FD フォーラム 2012 第 1 部 基調講演 「大学院改革の課題」 金子 元久 氏 筑波大学大学研究センター教授、高等教育学会会長 第 2 部 事例報告 事例報告 1 「龍谷大学大学院政策学研究科における高度専門職業人養成の取り組み」 石田 徹 龍谷大学大学院政策学研究科長 事例報告 2 「神戸大学大学院経済学研究科における学部大学院一貫教育の試み」 藤田 誠一 氏 神戸大学大学院経済学研究科教授 事例報告 3 「同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の取り組み」 内藤 正典 氏 (神戸大学大学院経済学研究科教授) 第 3 部 パネルディスカッション 金子 元久 筑波大学大学研究センター教授、高等教育学会会長 藤田 誠一 神戸大学大学院経済学研究科教授 内藤 正典 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科長</p>

	<p>石田 徹 (龍谷大学大学院政策学研究科長) コーディネーター 清水 耕介 (龍谷大学国際文化学部教授) 総合司会 長谷川 岳史 (龍谷大学大学教育開発センター長) 於：龍谷大学深草学舎</p>
2013.1.9-10 【共催】	<p>滋賀県立大学主催 関西地区 FD 連絡協議会 FD 共同実施 WG 共催 『科学的和文作文法講座 公開授業・検討会 －卒業論文等の作文指導で悩んでいる先生方のために－』 講師：滋賀県立大学教育実践支援室長 倉茂好匡 於：滋賀県立大学 A 4 棟 1 0 7 中講義室</p>
1.27 【協賛】	<p>京都大学高等教育研究開発推進センター主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 第 85 回公開研究会 『ネットワーク時代の大学教育改善－学びと教えの相互進化を持続させる－』 【第一部】 基調講演 1 “Designing for Innovation: Teaching, Learning and the Culture of the University” Randy Bass (Associate Provost / Executive Director, Center for New Designs in Learning & Scholarship, Georgetown University) 問題提起 「日本の大学教育の課題と可能性－米国との比較という観点から－」 飯吉 透 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) 【第二部】 趣旨説明 松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) 基調講演 2 “Terms of Engagement: Understanding and Promoting Student Engagement in Today’s College Classroom” Elizabeth Barkley (Professor, Foothill College Fine Arts and Communication Division) 報告 1 「教育改善のための文化を創る－京都大学文学研究科プレ FD プロジェクト を中心に－」 田口 真奈 (京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授) 報告 2 「大学教育実践の可視化・共有化による FD ネットワーク形成」 酒井 博之 (京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授) 報告 3 「学習ツールとしての学習評価－組織的なパフォーマンス評価の取組を事例 として－」 松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター 教授) 報告 4 「学生の学びと成長データの理論的総括」</p>

	<p>溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授） ディスカッション 閉会挨拶 大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター センター長） 於：京都大学 芝蘭会館（稲盛ホール）</p>
2.15 【協賛】	<p>神戸大学主催 関西地区 FD 連絡協議会協賛 平成 24 年度 神戸大学国際文化学研究科 FD 講演会 「ゼミ指導、うまくいっていますか？」 講演者：北野 収 氏（獨協大学外国語学部 教授） 於：神戸大学国際文化学研究科</p>
3.1 【共催】	<p>京都大学高等教育研究開発推進センター主催 関西地区 FD 連絡協議会共催 MOST 講習会 趣旨説明、MOST・KEEP Toolkit の概要説明 酒井博之（京都大学高等教育研究開発推進センター特定准教授） MOST 操作説明 参加者によるスナップショットの作成 於：京都大学吉田南 1 号館</p>
3.14-15 【協賛】	<p>第 19 回大学教育研究フォーラム 開会の挨拶：松本紘（京都大学総長） シンポジウム：「『学び』を改めて問うー主体的な学びとは何なのかー」 報告者 渡部信一（東北大学大学院教育情報学研究部教授／研究部長） 美馬のゆり（公立ほこだて未来大学情報科学部教授） 田中智志（東京大学大学院教育学研究科教授） 藤田英典（共栄大学教育学部教授／学部長） 松坂浩史（文部科学省高等教育局大学振興課 大学改革推進室長） 司会：松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授） その他、個人研究発表、小講演、参加者企画セッション 於：京都大学 百周年時計台記念館・吉田南 1 号館・吉田南総合館</p>

(吉田 裕子)

